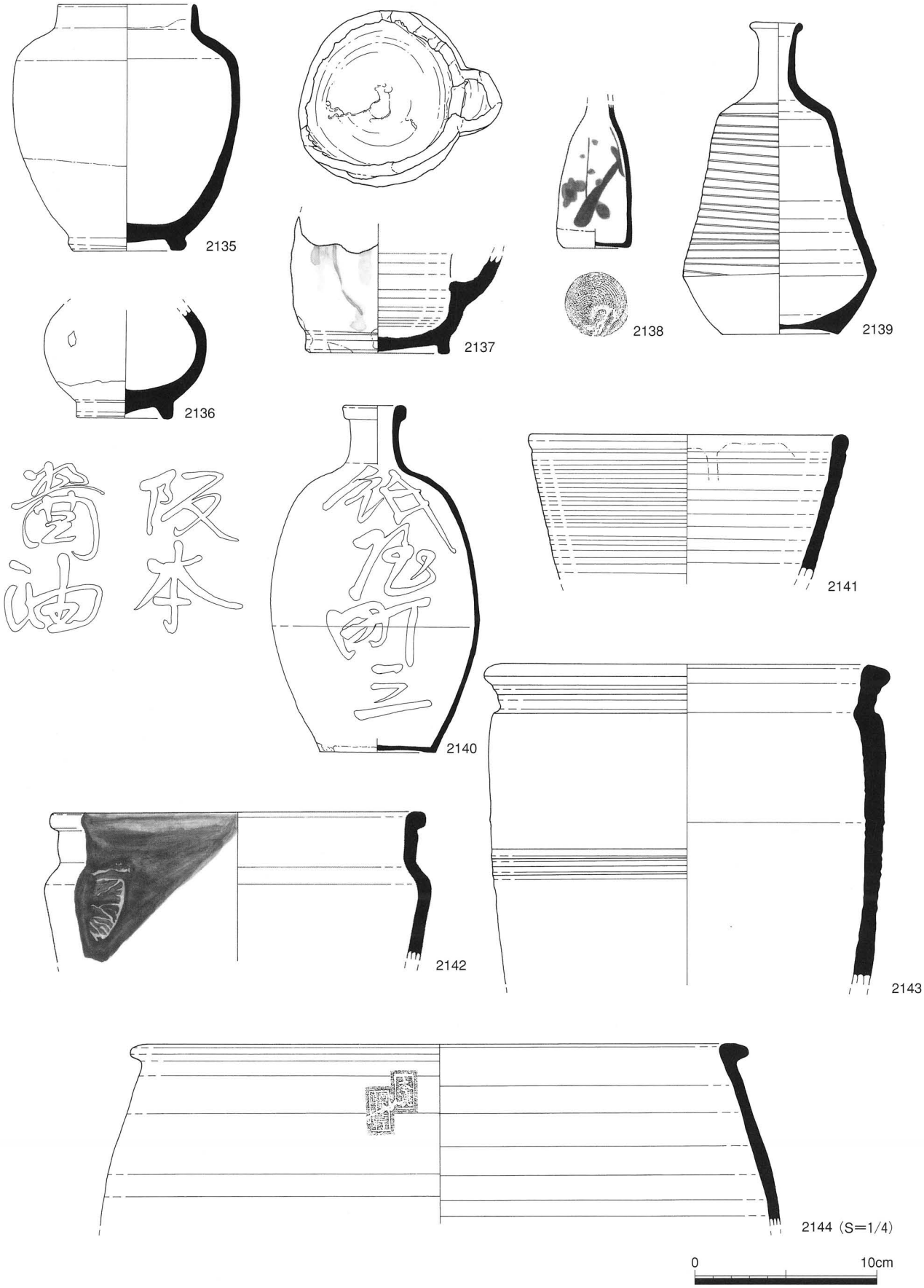
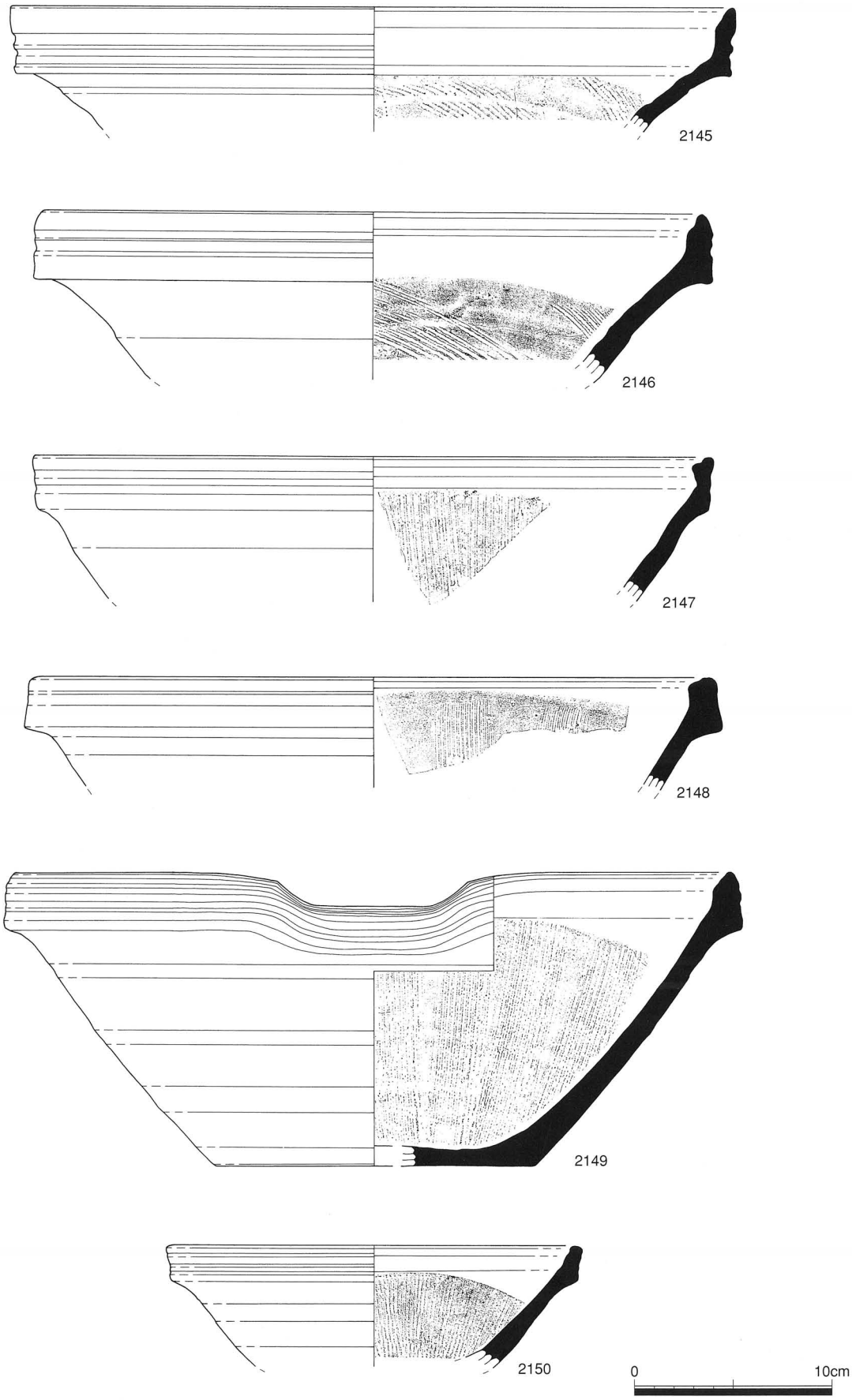
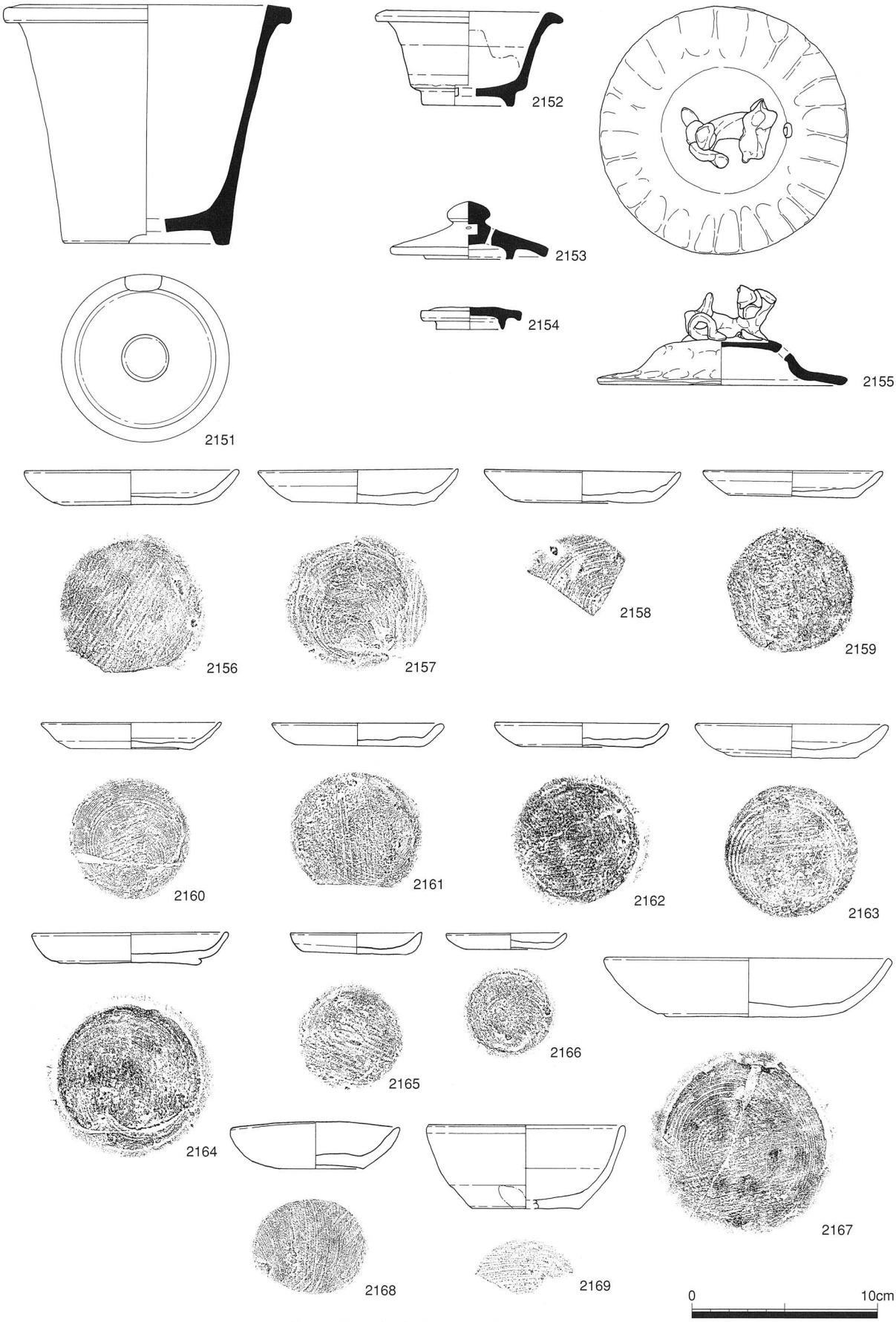


第476図　包含層出土遺物実測図（9）

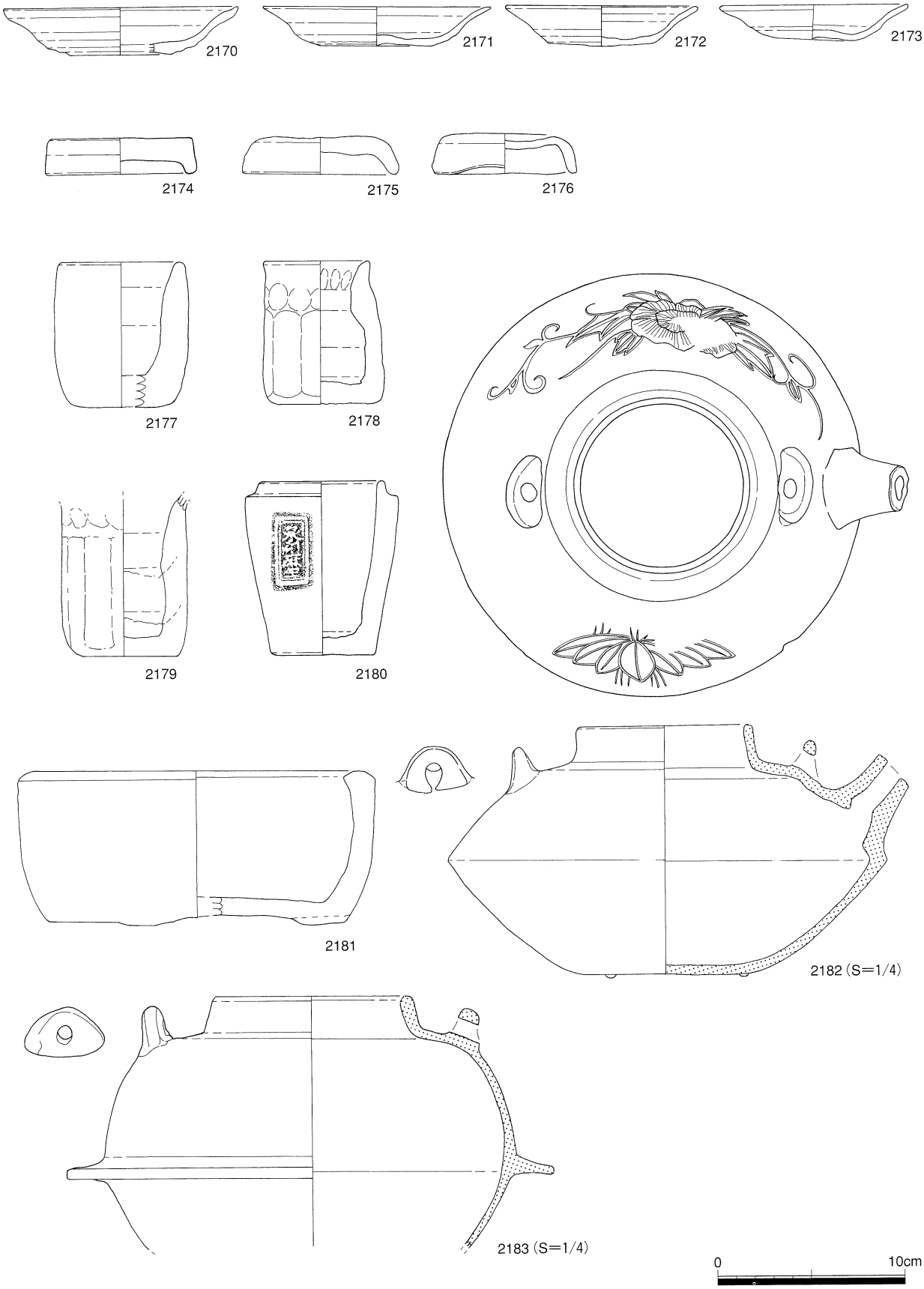


第477図　包含層出土遺物実測図 (10)

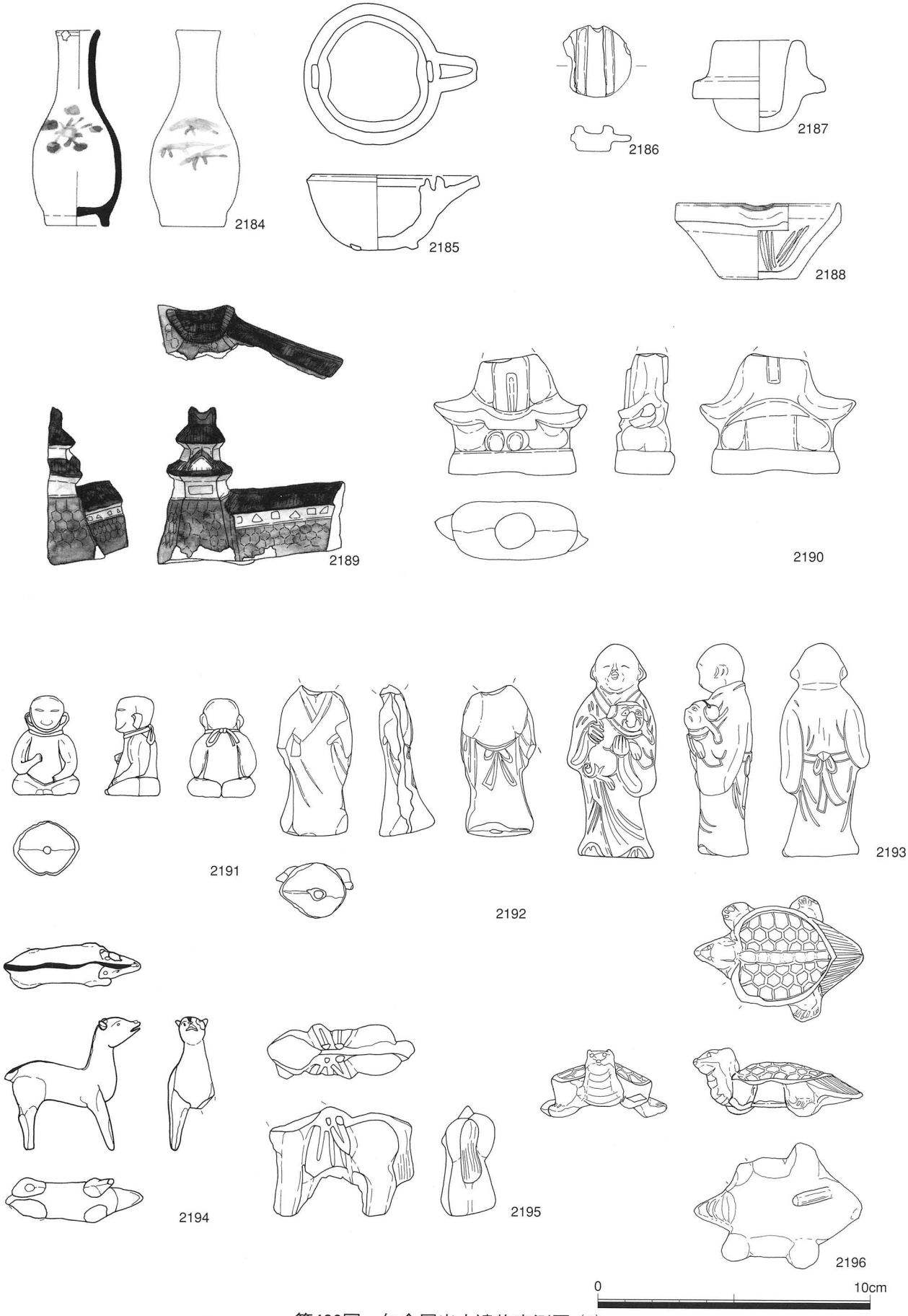


第478図　包含層出土遺物実測図 (11)

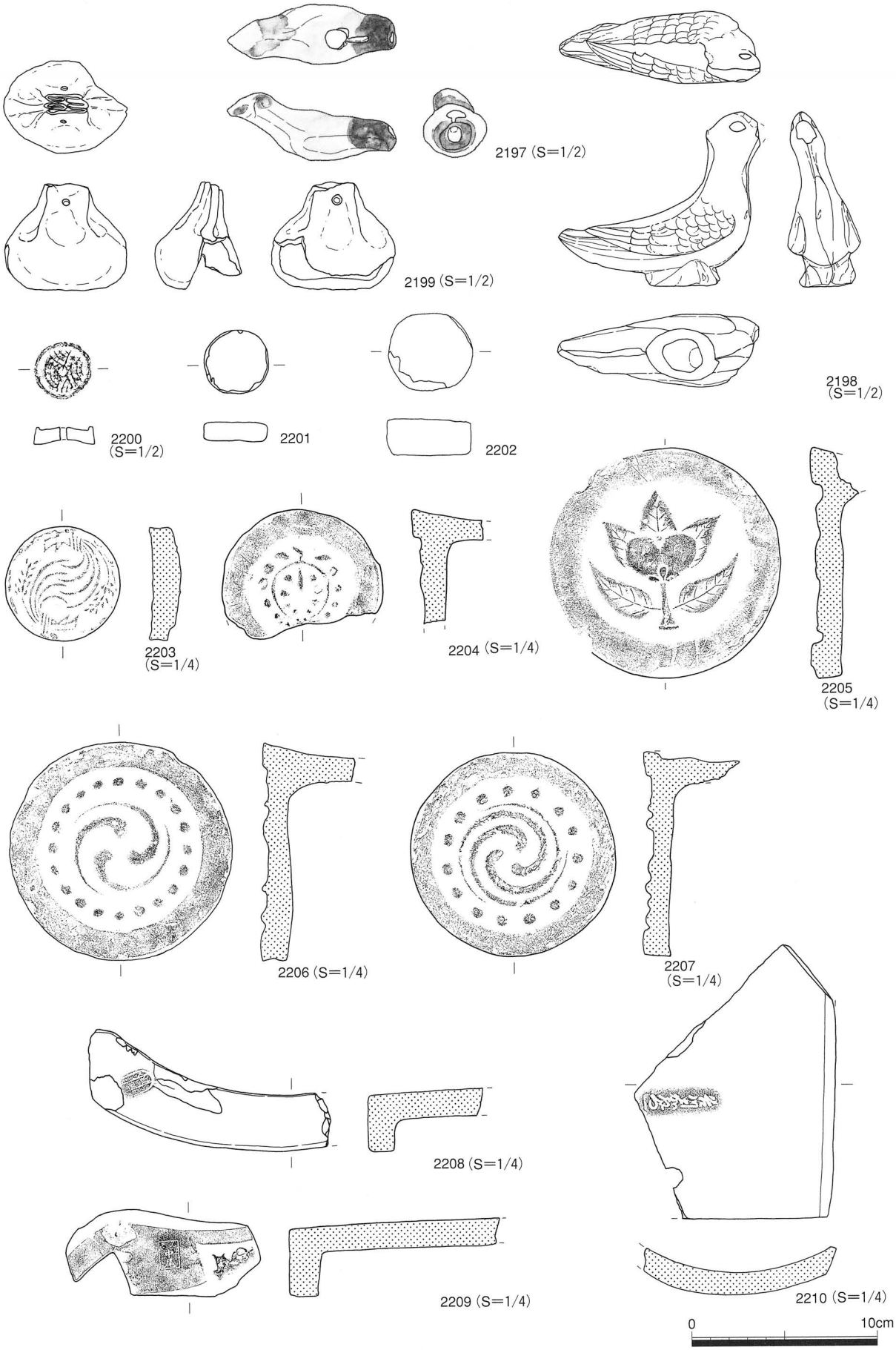
の皿である。2172は回転ヘラ切りの後にナデが施された底部を持つ土師質の灯明皿である。口縁部には煤が付着している。2173は土師質の皿である。2174～2176は土師質の焼き塩壺の蓋である。2174は口径75㎜を測る。内面には布目痕がみえる。2175は内面には布目痕が残されている。2176は皿形をしている。2177～2180は土師質の焼塩壺である。2177は輪積み成形で、内外面にはナデによる調整が行われている。2178は内外に指オサエ痕が見える。2179は輪積み成形で内面には布目痕がある。2180は板作り成形で体部には「泉州麻生」と刻印が押されている。2181は口径165㎜を測る土師質の火入れである。底部には３足の脚が付けられ、外面には煤が付着している。2182は型作貼付成形で製作された瓦質の土瓶である。2183は両肩に耳が貼付られた瓦質の茶釜である。2184は外面に染付により笹と梅が描かれた肥前系のミニチュアの磁器瓶である。2185土師質のミニチュア片口の鍋である。2186は土師質のミニチュア釜蓋である。型作り貼付成形で上面には柿釉がかけられている。2187は型作り成形で製作された土製のミニチュアの羽釜の身でままごと道具である。2188は土製のままごと道具のミニチュア擂鉢である。内面には５カ所に２本～３本の擂目が見える。口縁部には煤が付着しており灯明皿に二次利用した可能性がある。2189は土製の城郭である。型作り貼合せ成形で製作され褐釉・緑釉・白釉などの彩色が施されている。箱庭道具として製作されたものである。2190は土製の人物座像をかたどった人形である。型作り貼合せの中実で底部に穿孔がある。2191は型作り貼合せで製作された人物座像をかたどった土製の人形である。2192は土製人形である。型作り貼合せ成形である。2193は人物が犬を抱いている狆抱き童子の土製の人形である。型作り貼合せ成形で製作され、内部は中空で振ると音が鳴る。外面には雲母が付着している。2194は型作りによって製作された土師質の馬の人形である。2195は馬をかたどった土製人形である。型作り貼合せ成形で製作され、上部には赤色塗料が僅かに認められる。2196は亀をかたどった土製人形である。型作り貼合せ成形で製作されている。2197は土師質の鳩笛である。長径61㎜を測り、外面には緑釉と灰釉が施釉されている。2198は鳥を形取った土製の人形である。中実であるが、底部に大きな穿孔がある。2199は土製の鈴である。手捏ね絞り後貼付されている。穿孔がある。2200は土製の泥面子である。型作、面打による浪銭である。2201は長径34㎜を測る瓦質の加工円盤である。2202は瓦質の加工円盤である。2203は軒桟瓦である。稲丸紋が配された蜂須賀家替紋瓦である。2204は瓦当部に丸ノ中藤ノ丸紋が配された軒丸瓦である。2205は瓦当部に丸の中橘の紋が配された軒丸瓦である。2206は瓦当部に丸ノ中連珠三巴の紋が配された軒丸瓦である。2207は軒丸瓦である。右巻き連珠(15珠) 巴紋である。2208・2209は軒平瓦である。2208は円刻内に「大・近藤・特製」と印刻されている。2209は均整唐草文が配され方形枠内に「池谷・中尾」と刻印がある。2210は平瓦である。上部には「谷川嘉左衛門」と刻印がある。2211は木製の漆椀である。全面に赤漆が塗られ、外面には黒漆で文様が描かれている。2212は木製品の小鉢である。全面に黒漆が塗られ、外面には２カ所に金彩による鴛鴦の文が描かれている。2213は骨製品のヘラである。柄の部分には花弁が陰刻され、穿孔が１カ所に見える。2214は角加工品である。2215は銅製品の刀装具で小柄である。格子柄の文様が金彩されている。2216は銅製の飾り金具である。2217は銅製品の簪飾りである。2218は用途不明の鉄製品である。2219は銅製の匙である。2220・2221は銅製品の簪である。2222～2225は銅製の煙管雁首である。2226～2230は銅製品の煙管吸口である。2231は銅製品の杓子である。2232～2234は銅製の匙である。2235は鉄製の鋏である。2236は鉄製品の包丁である。2237は鉄製の鍬である。先端部分は欠損している。2238は銅製の瓦釘である。断面形状は方形を呈している。2239・2240は銅製品の箸である。2241は銅銭の皇宋通宝である。2242は銅銭で嘉祐□□（通宝・元宝）と読める。2243は寛永通宝（新）である。2244・2245は寛永通宝(新)である。2246



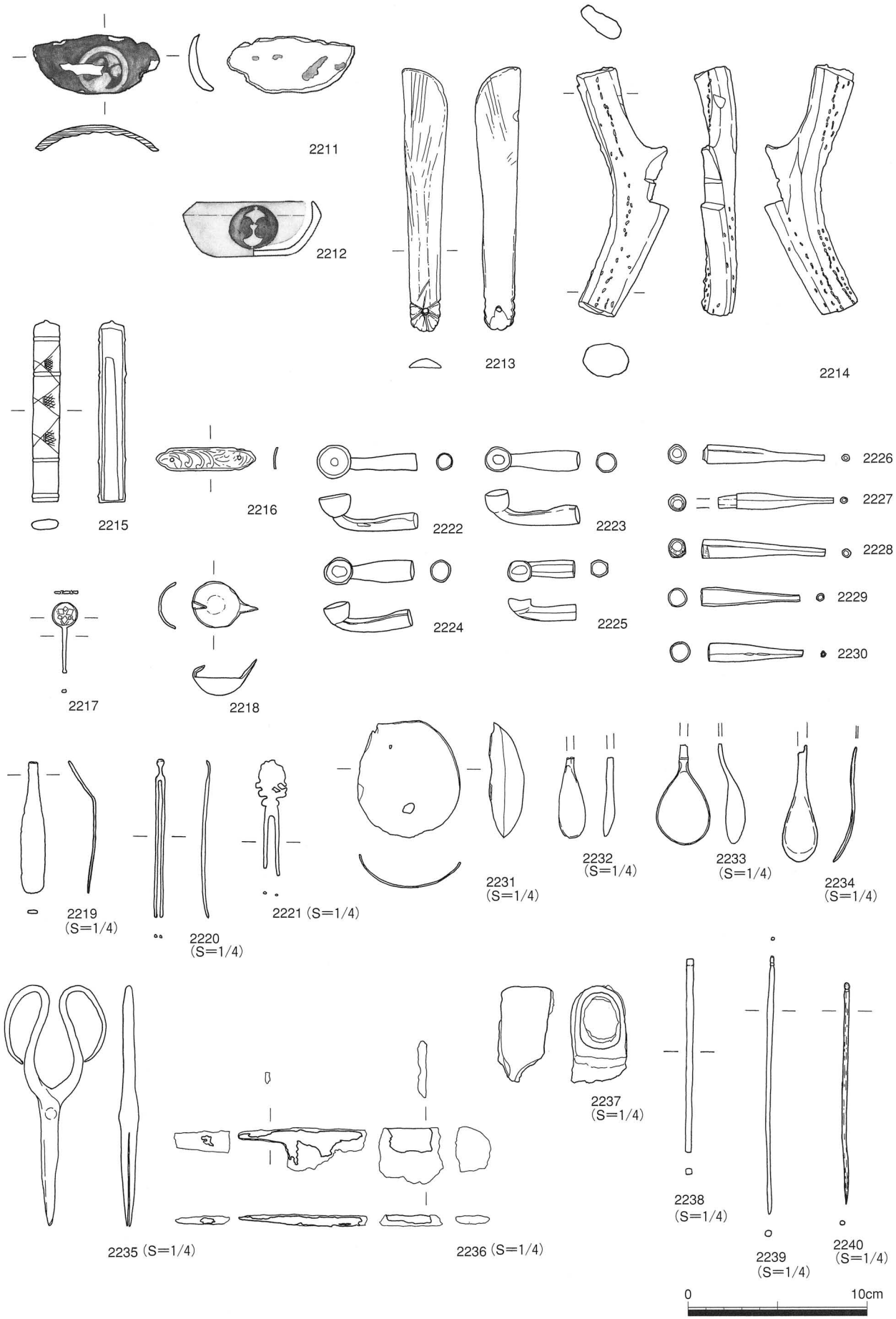
第479図　包含層出土遺物実測図 (12)



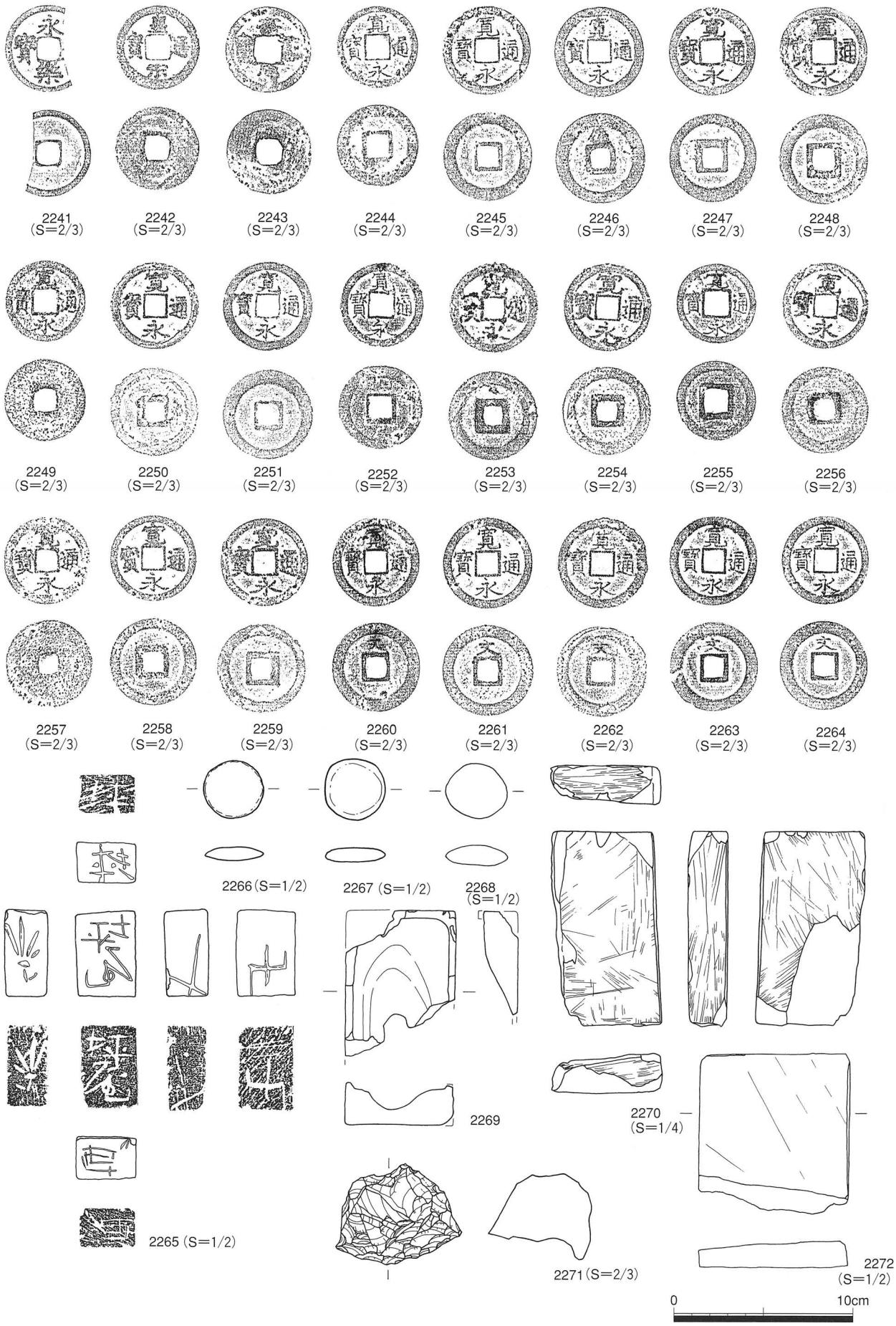
第480図　包含層出土遺物実測図 (13)



第481図　包含層出土遺物実測図 (14)



第482図　包含層出土遺物実測図 (15)



第483図　包含層出土遺物実測図 (16)

は寛永通宝(新)である。背上には「文」と配している。2247・2248は寛永通宝(古)である。2249～2252は銅銭の寛永通宝（新）である。2253・2254は銅銭の寛永通宝(古)である。2255は銅銭の寛永通宝(新)である。2256～2259は銅銭の寛永通宝（古）である。2260～2264は銅銭の寛永通宝(新)である。背上には「文」と配している。2265は石製の印鑑である。該当地に居住された記録のある坪内氏の印と思われる。全面(6面)に刻印が認められる。「点」「坪」「坪庵」「十」「七」等。18C 後半からのものである。2266～2268は粘板岩製の碁石である。2269は粘板岩を素材とする石製の硯である。2270は滑石製の砥石と思われる石製品である。2271はチャートを素材に使用する火打ち石である。2272石製品の砥石である。石材は凝灰岩で砥ぎ面は 4 面確認できる。

2　まとめ

これまでにも徳島城下町の発掘調査が実施されているが、4,650㎡と大規模かつ面的に侍屋敷地の中心を発掘調査された事例は数少なく、城下町の様相を把握する上で重要な資料が得られた。

絵図・文献などによると調査地点は蜂須賀駿河家の屋敷地であったことが記され、安政年間（1854～1859年）「御山下島分絵図　徳島」には周辺に「蜂須賀隼人」（中老1300石）・蜂須賀靱負（中老700石）などの一族の名もみられる。蜂須賀駿河家は阿波徳島藩主十代蜂須賀重喜公の四男である初代蜂須賀駿河喜儀より代々阿波藩の家老職（重臣 藩主の補佐役）を務めた家系であった。石高は4000石で屋敷地は、一町一反二歩（3,302坪）の広さであったと云われ、発掘調査の結果においても、礎石の配置などから入母屋の御殿造りの大規模な屋敷であったと想定される。蜂須賀氏関連の屋敷の間取り等は、今のところ絵図面などは見つかっておらず、現段階では現存する他家の間取りや屋敷地内の位置関係などから、「中奥」あるいは「奥」と呼ばれる屋敷の中でも私的な空間にあたる部分の可能性が高いと考えられる。

第１遺構面においては巨大な青石を用いた礎石の配置（礎石建物跡）や青石を組んだ水路・蔵の基礎と思われる石列や屋敷境の石列が確認されている。石組みは割石を用いた「布積み崩し」（穴太積み）という横目地が一部通る高度な石組み技術で構築されている。出土した屋敷堺は２条の石組み溝（排水路）の間に礫を埋め込み地堅めした上に、石組みの石列があり、重量のある構造物の基礎と考えられ、築地塀のような頑丈な構築物が存在していたものと思われる。また、蜂須賀氏の塀の外側には石組み溝が構築されている。

これまでの徳島城下町の発掘調査でも屋敷境付近では２条の素堀溝が確認されており、土地の所有を明示する「屋敷境溝」として確認されている。今回確認された「蜂須賀」「坪内」両家の屋敷境は石組（構造物）が施されており、土地の所有がより明確化されているものと思われ、それぞれの屋敷地の立地や性格に応じて各種の区画（溝、塀）が構築されたものと考えられる。

また今回の調査では、第４遺構面（16C 末～17C 初頭）においても遺構・遺物が確認されている。出土した掘立柱建物跡は柱穴には柱痕が残り、10～12㎝の角材が使われていたと思われる。出土遺物は17C 初頭の瀬戸の天目茶碗や志野の方形皿などがある。中徳島町２丁目遺跡（旧徳島動物園跡）の発掘調査成果ともあわせて渭山城関連の遺構の可能性が考えられる。今回の発掘調査で蜂須賀氏入府以前、城下町が形成される以前の段階または城下町形成初期段階においての人々の生活の痕跡が確認されたのは中徳島町２丁目遺跡（旧徳島動物園跡）の調査に次いで２例目で、城下町形成初期様相を知る上で注目される。

遺物について

本遺跡の出土遺物は、総点数319,000点あまりである。内訳は、近世陶器，磁器，木製品(含む漆器)，瓦，金属製品，貝殻，土製品（含む玩具），古銭等多岐にわたる。

陶磁器では瀬戸美濃系，京信楽系，肥前（唐津），伊万里，備前，大谷，丹波，明石，堺など、多くの産地のものが出土した。その多くは日常雑器であり、擂鉢，火鉢，消し壺，焙烙，竈，徳利，瓶，皿，鍋片等であった。擂鉢では16C 後半～19C 頃まで、多くの個体が出土した。

また、古唐津，志野，織部の優品や、いわゆる「注連縄文茶碗」も出土している。

その他多種多様な日常生活用品（漆器・焙烙・焜炉・焼塩壺・火鉢・灯明皿・硯・簪・櫛・キセル・徳利・植木鉢・土人形・火打石・銭貨など）が出土している。量的には肥前系（唐津、伊万里など）の椀・皿・鉢などの食膳具が多く見られる。

以下、主な遺物を記述する。

陶器

胎土目唐津皿・絵志野向付・天目茶碗　第４遺構面などから出土。備前擂鉢・砂目唐津皿・志野織部向付・青織部向付など第３遺構面を中心に出土。第１遺構面では瀬戸美濃系水鉢や甕（19C 中葉）。注連縄文茶碗（伊勢エビが波の上に乗っている図柄のもの）。作者もしくは産地等の印が胴に描かれている。その他唐津を中心に皿や鉢など多種・多量に出土している。在地系では大谷の大甕や徳利、珉平の溝縁小判皿などを中心に多く出土した。

磁器

磁器はそのほとんどが、一般的に「伊万里」「有田」と呼ばれる肥前系の呉須による染付を施されたものであり、皿，徳利，碗などを中心に多量に出土した。古伊万里をはじめ、その他肥前系の柿右衛門の鉢（1670～90）でヨーロッパへも輸出した優品なども出土している。また少数であるが中国製の青白磁・青花磁器（中国漳州窯製）皿等も出土した。

土師質土器

土師質の土器では、皿，灯明受皿，焙烙，秉燭，土瓶，火消壺蓋，風炉，七厘，土能，土錘，土管，体部に堺産の刻印のある焼塩壺や蓋，など様々な器種のものが出土した。

土製品

土製品の多くは、玩具に関係したものであった。馬・鳥・猿・犬・亀・蛙といった動物や魚、釜・瓶・擂鉢など子供が遊びに使ったと思われる様々なままごと道具、橋・城・民家などの箱庭道具などの遺物が数多く出土した。他には天神・虚無僧・七福神や仏像など信仰の対象物等、その他泥面子などが出土した。

瓦

出土した瓦には産地を示す泉州産や在地産である大谷産の刻印のあるものが見られ、当該屋敷でも徳島城で使われていたものと同じ瓦が使われていたことがわかる。また蜂須賀氏家紋入り瓦は「稲丸」と呼ばれる阿波藩主である蜂須賀氏の替紋である。蜂須賀氏については「卍」がよく知られているが、他に「稲丸」「桐」「抱柏」がある。替紋は藩主の使用の他にも、分家や重臣に与えられたりしたもので、家紋の使用については「藩法集243」に規定が記されており、これを裏付ける資料として注目される。また、家紋の使い分けについては文献資料などでも知り得ぬ不明な部分が多くあるが、今回の調査では「卍」の家紋は１点も出土しておらず、そのことからも「卍」は藩主（本家）のみの使用であったと想定できる。その他蜂須賀氏以前の武家（立木家）を示す『藤丸』の家紋入り軒丸瓦なども出土している。

木製品

木製品は、下駄や建築部材・箸・桶・蓋・椀等の漆器・膳（折敷など）・柄杓・柄・櫛・栓・釣瓶など約326点を掲載した。将棋の碁盤の脚部・鏡箱なども数点出土した。また、椀等の漆器も多く出土したが、残り具合が悪く復元できる状態のものは少なかった。その他木簡については、以下にまとめる。

木　簡

木簡は22点出土している。木簡の出土地はいずれも廃棄土坑で、陶磁器や土製品・木製品などの遺物と共伴している。

2001年度調査区 SK4055・SK4052は17世紀後半の土坑である。SK3066も18世紀中頃の土坑ですべて屋敷地内のゴミ穴である。

2002年度調査区は2001年度の東側に続く調査区である。SK4149は坪内家屋敷奥にあたるとみられる土坑で、その北の屋敷境付近にあるのがSK3229の土坑でこちらもすべて屋敷地内のゴミ穴である。

木簡の釈文・内容

2001年調査区

・SK4055出土

1　・「　＜山田織部様　阿ハ　猪山　」

　　・「　＜五ッ之内　山田彦八郎　　」　　163×25×4

2　・「たふ八たも　　」

　　・「十八たん　□　□　　」　　(110)×(17)×3

　　[緒][村]

・SK4052出土

3　・「　＜中庄　□　□　□　　」

　　[与]

　　・「　＜五斗　□　□□　□□□　ェ門　」

　　135×22×4

4　・「　＜[　　]」

　　・「　＜四斗入　　」　　132×111×4

5　・「　＜[　　]

　　・「　＜□くかし　さま　御内　参

　　(152)×(235)×6

6　・「　＜[　　])×

　　[壱]

　　・「　＜[　　])　　(63)×16×3

・SK3066出土

7　[　　]　　(120)×26×4

2002年度調査区

・SK4199出土

　　▲[番]

8　＜■□□　　95×20×4

・SK3229出土

9	・「　長井六郎　　」	
	・「　長井六助	
	長井六郎右衛門　」	193×66×10
10	「　新　平　」	112×15×3
11	「　岩山所　」	134×60×7

1は上端部左右の切り込みが深く、山田彦八郎から兄である山田織部に宛てた荷札木簡である。「阿ハノ猪山（より）」と読むと送主山田彦八郎は徳島に、宛先の山田織部は国外（江戸？）にいることになる。2は「緒」又は「指」と書かれ(註1)、法量を表す荷札木簡である。3の「五斗俵」は阿波では一俵の内容が五斗であったことが分かっており、おそらく米俵を指していた木簡であろう。「中庄村」とすれば同村に領地のあった給人(藩士)の物と考えられるが、出土地点・居住者の領地とは該当しない。4は上端部の左右に深く切り込みが入り、「四斗入」米俵（米でない可能性もある）を示す。裏面には年貢提供者の人名だと思われる墨書が確認できるが判読できない。5は「様付」「まいる」は私的表現で、女性に宛てた品物への木簡の可能性があり、私的な交流・交際・武家社会の贈答関係がうかがえる木簡である。6は上端部左右に切り込みが入り下端部は折れている。表面は判読不能。裏面の一文字は「壱」か。7は上端部は折れており下端部は尖っている。8は上端部左右に切り込みが入り下端部は尖る。「▲」と文字の上から墨を塗っている。9は坪内家屋敷境付近より出土した。木札は上端部が稜なしで尖って、下端部は直頭型で表面は平面であるが、裏面は木材の側面の曲面をそのまま利用している。両面に「長井」という三名の人名が書かれている。坪内家と道をはさんだ向かいの屋敷の住人であることが資料よりわかっている。10は「新平」と人名と思われる墨書があり下端が尖っている。11は縦長で方形の木札である。用途は不明で「岩山所」と読みとれる墨書がある。

なお、釈読は根津寿夫氏（徳島市立徳島城博物館）のご教示を得た。

金属製品

金属製品としては、箸，鎌，蝶番，簪，煙管，匙，小柄，鍬，家具等の飾りなど、銅製や鉄製などの様々な製品が出土した。また、小刀や古銭については、そのほとんどが寛永通宝（古寛永も含む）であり、40枚を数える。また、宋銭も数枚出土したが、明銭としては「永楽通宝」などが出土した。

石製品

砥石をはじめ硯・火打ち石・碁石・臼など生活日常品や、坪内氏と思われる「坪庵」と刻印された印章や漁網錘鋳型などの石製品が出土した。

その他

・貝殻……　第1遺構面、蜂須賀家屋敷内より出土した。種類は多様でハマグリ・ヤマトシジミ・サザエ・バイ・イワガキ・テングニシ・アカガイ・イタヤガイ・マツバガイ・サトウガイ・ツメタガイ・アカニシ・クロアワビ・マダカアワビ・サンゴなどだと考えられる。本書に写真のみ掲載した完形に近い個体数は62個を数える。貝殻は多量に出土しているが、ほとんどが原形をとどめず全体の個体数は不明である。

・種・棕櫚……ドングリ・マツボックリなどの種子、棕櫚の鼻緒とほうきが出土している。

今回の調査では明銭や宋銭をはじめ、約319,000点の遺物が出土し、江戸時代初めから幕末にいたるまでの遺構面も検出された。後世の攪乱のため、遺構面の残りは決して良好とは言い難かったが、ある程度近世の徳島地区の武家屋敷（上級武士の侍屋敷）の様子が把握できたことは大変意義があったと考える。ただ、調査区には限界があり、屋敷地全面の調査をすることはできなかった。今後、周辺の地区の調査が行われる際に、今回の調査結果と照らし合わせることで、よりはっきりした中徳島における近世の武家屋敷の様子が捉えられるに違いない。

（参考文献）

（註１）根津寿夫「徳島藩中老酒部家出土の荷札木簡について」『論文 徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会 2002
江戸遺跡研究会編『図説江戸考古学研究辞典』　柏木書店　2001
『論文徳島の考古学』　徳島考古学論集刊行会　2002
『増補やきもの辞典』　平凡社　2000
小川啓二『そば猪口絵柄事典』　光芸出版社　1987
『別冊太陽 NO63』　平凡社　2000
『柴田コレクション（Ⅵ）』　佐賀県立九州陶磁文化館　1998
『九州陶磁の編年』　九州近世陶磁学会　2000
大橋康二『肥前陶磁』　ニュー・サイエンス社　2001
『織部の流通圏を探る』　土岐市美濃陶磁歴史館　2004
新宿区内藤町遺跡調査会『東京都新宿区内藤町遺跡』　東京都建設局・新宿区内藤町遺跡調査会　1992
『汐留遺跡』　汐留地区遺跡調査会　1996
東京都教育文化財団『汐留遺跡Ⅰ』　東京都埋蔵文化財センター　1997
東京都教育文化財団『汐留遺跡Ⅱ』　東京都埋蔵文化財センター　2000
東京都教育文化財団『汐留遺跡Ⅲ』　東京都埋蔵文化財センター　2003
石尾和仁『新蔵１丁目遺跡合同庁舎地点』　徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター　1998
日下正剛『新蔵１丁目遺跡企業局総合管理センター地点』　徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター 1998
日下正剛『南前川１丁目遺跡』　徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター　2002
斉藤　剛『徳島城下町遺跡出来島本町１丁目地点』　徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター・徳島労働局日本障害者雇用促進協会　2003

Ⅳ　自然科学的分析

徳島城下町遺跡　中徳島町１丁目地点動物遺存体分析

岡山理科大学　総合情報学部　生物地球システム学科
富　岡　直　人

１　出土状況と遺構の状況

徳島城下町遺跡　中徳島町１丁目地点は、渭山・城山とも呼ばれる徳島城の東に残された近世遺跡で、四国最大の河川である吉野川南岸に位置しており、間近に河口を望んだ渭津の一角にある。2001年４月１日～2002年３月31日に実施された発掘調査（徳島県埋蔵文化財センター）によって、ここから多量の動物遺存体が出土した。出土地点は標高約２m 前後の低湿地で、骨格類は鉄分を含む地下水に浸潤した結果、茶褐色を呈し、一部はビビアナイト（藍鉄鋼（Vivianite : $Fe_3P_2O_8$' $8H_2O$））を析出して、脆弱化している。

中徳島町１丁目地点には中世・江戸時代を遡る遺構が極めて少なく、1585年に蜂須賀家が徳島城を開くまで、この地点に生活遺構を残すような利用はなかったものと推定される。

文献上この遺跡地は、寛永年間（1624－1628年）に残された『御山下絵図(忠秀様御代御山下絵図)』に「侍屋敷」と記されたのが初見である。その後1691年と1728－1730年の絵図では500石取り程度の藩士、1773年には蜂須賀駿河喜儀（阿波十代藩主　蜂須賀重喜の四男）が屋敷を構え、1854－1859年の絵図でも一部に蜂須賀安藝の名前が残され、幕末まで続いたと考えられる。

堆積層には人為的に運搬された土砂が確認され、土壌改良が実施された様子がうかがわれる。包含層・土坑・溝・建物跡より木製品・陶磁器等が多量に出土している。発掘によって確認された遺構面は４つで、第１遺構面：18世紀第４四半期～幕末、第２遺構面：18世紀前半、第３遺構面：17世紀後半、第４遺構面：16世紀末～17世紀初頭の包含層、溝、土坑等が把握された。これらの遺構や包含層から、中世末期より近世に属する貝類、タイ科等の魚類、ニワトリ等の鳥類、イエネコ・ウシ・ウマ・ニホンジカ・イノシシ類を含む哺乳類が計101点検出された。

18世紀に属する動物遺存体を多量に出土した新蔵町３丁目遺跡徳島保健所地点――一部に17・19世紀の資料を含む――は、本遺跡よりわずか250m 南に離れた地点に位置しており、中徳島町１丁目地点とともに江戸時代の徳島城下を語る貴重な資料を豊富に出土している。

２　出土動物遺存体の特徴

出土した動物遺存体資料を分類・同定し、第１表に記載するとともに、Driesch（1976）等の常法に沿って計測した後、実体顕微鏡で観察し、解体痕跡の分析、死亡年齢の推定を実施し、第２表に付記した。

検出された動物遺存体のうち、綱目科属種の分類名が明らかになったものについて、標準和名と学名を第１表に掲げる。

第１表　徳島城下町遺跡　中徳島町１丁目地点出土動物遺存体種名表

List of the animal remains from Nakatokushimacho site, Tokushima City, Tokushima Prefecture

動物界	Animalia
刺胞動物門	Cnidari
花虫綱	Anthozoa
イシサンゴ目	Scleractinia
軟体動物門	Mollusca
腹足綱	Gastropoda
オキナエビスガイ目	Archaeogastropoda
リュウテンサザエ科	Turbinidae
サザエ	*Batillus cornutus* (Lightfoot)
ミミガイ科	Haliotidae
アワビ属	*Haliotis* indet.
マダカアワビ	*Haliotis (Nordotis) madaka* Habe
バイ目	Neogastropoda
エゾバイ科	Buccinidae
バイ	*Babylonia japonica* (Reeve)
アクキガイ科	Muricidae
アカニシ	*Rapana venosa venosa* (Valenciennes)
テングニシ科	Melongenidae
テングニシ	*Hemifusus tuba* (Gmelin)
ニナ目	Mesogastropoda
フジツガイ科	Cymatiidae
ボウシュウボラ	*Charonia sauliae sauliae* (Reeve)
斧足綱	Pelecypoda
ハマグリ目	Heterodonta
マルスダレガイ科	Veneridae
ハマグリ	*Meretrix lusoria* (Rödding)
シジミガイ科	Corbiculidae
ヤマトシジミ	*Corbicula japonica* Prime
ウグイスガイ目	Pteriomorphia
フネガイ科	Arcidae
アカガイ	*Scapharca broughtonii* (Schrenck)
サトウガイ	*Scapharca satowi* Dunker
イタヤガイ科	Pectiniidaebicans
イタヤガイ	*Pecten (Notovola) albicans* (Schröter)
イタボガキ科	Ostreidae
脊椎動物門	Vertebrata
魚上綱	Pisces
硬骨魚綱	Osteichthyes
スズキ目	Perciformes
スズキ科	Percochthydae
スズキ	*Lateolabrax japonicus* (Cuvier et Valenciennes)
タイ科	Sparidae
マダイ	*Pagrus major* (Temminck et Schlegel)
アマダイ科	Branchiostegidae
アマダイ属	*Branchiostegus* sp. indet.
フエフキダイ科	Lethrinidae
フエフキダイ属	Lethrinus
アジ科	Carangidae
ブリ	*Seriola quinqueradiata* Temminck et Schlegel
鳥綱	Aves
キジ目	Galliformes
キジ科	Phasianidae
キジ属	*Phasianidus* sp. indet.
ニワトリ	*Gallus gallus domesticus* Brisson
ガンカモ目	Anseriformes
ガンカモ科	Anatidae
マガンクラス	Goose class
カモ類Aクラス	wild ducks A class
カモ類Bクラス	wild ducks B class
カモ類Cクラス	wild ducks C class
コウノトリ目	Ciconiiformes
サギ科	Ardeidae
タカ目	Falcioniformes
タカ科	Accipitridae
哺乳綱	Mammalia
ウシ目（偶蹄目）	Artiodactyla
ウシ科	Bovidae
イノシシ科	Suidae
イノシシ類	*Sus scrofa* subsp. indet.
シカ科	Cervidae
ニホンジカ	*Cervus nippon* Temminck
ウマ目	Perissodactyla
ウマ科	Equidae
ウマ	*Equus caballus* Linnaeus
ネコ目（食肉目）	Carnivora
ネコ科	Feridae
イエネコ	*Felis catus* Linnaeus
イヌ科	Canidae
イヌ	*Canis familiaris* Temminck
ネズミ目（嚙歯目）	Rodentia
ネズミ科	Muridae

動物界　Animalia

刺胞動物門　Cnidari

花虫綱　Anthozoa

イシサンゴ目　Scleractinia

出土資料は外表面に彫刻状の文様が展開するイシサンゴ目で、通称菊目石と呼ばれるものの一種である。このようなサンゴ類は近世遺跡からまれに発見され、加賀藩江戸藩邸跡（東京都文京区東京大学御

殿下記念館地点：金子1990）448号遺構、京都市平安京北辺四坊（御所関連遺跡：16～17世紀初頭：富岡2004）、岡山県岡山城二の丸跡（17世紀中葉の洪水砂中より出土：富岡1998）、岡山県天瀬遺跡（江戸後期：富岡2001）、長崎県出島遺跡などで出土している。鑑賞・薬品・防湿剤などに用いられた可能性が指摘されている。

軟体動物門　Mollusca

出土した軟体動物は、砂泥底と岩礁底の海水域に生息する腹足綱と斧足綱を主体とし、一部に汽水域に生息するヤマトシジミをまじえる。

軟体動物門	Mollusca
腹　足　綱	Gastropoda
オキナエビスガイ目	Archaeogastropoda
リュウテンサザエ科	Turbinidae
サザエ	*Batillus cornutus* (Lightfoot)
ミミガイ科	Haliotidae
アワビ属	Haliotis indet
マダカアワビ	*Haliotis (Nordotis) madaka* Habe
バイ目	Neogastropoda
エゾバイ科	Buccinidae
バイ	*Babylonia japonica* (Reeve)
アクキガイ科	Muricidae
アカニシ	*Rapana venosa venosa* (Valenciennes)
テングニシ科	Melongenidae
テングニシ	*Hemifusus tuba* (Gmelin)
ニナ目	Mesogastropoda
フジツガイ科	Cymatiidae
ボウシュウボラ	*Charonia sauliae sauliae* (Reeve)
斧　足　綱	Pelecypoda
ハマグリ目	Heterodonta
マルスダレガイ科	Veneridae
ハマグリ	*Meretrix lusoria* (Rödding)
シジミガイ科	Corbiculidae
ヤマトシジミ	*Corbicula japonica* Prime
ウグイスガイ目	Pteriomorphia
フネガイ科	Arcidae
アカガイ	*Scapharca broughtonii* (Schrenck)
サトウガイ	*Scapharca satowi* Dunker
イタヤガイ科	Pectiniidaebicans

イタヤガイ　　*PectenW (Notovola) albicans*（Schröter）

マダカアワビ、サザエ、ボウシュウボラは海水性の岩礁域から採集されたものと考えられる。一方でバイ、テングニシ、ハマグリ、アカガイ、サトウガイ、イタヤガイは砂底や泥底で採集されたものと考えられる。いずれも近接する海域の潮間帯より水深10m の範囲で捕獲が可能である。吉野川河口より外海にかけての沿岸が主たる採集・捕獲地点であろう。イタボガキ科は、いずれの底質でも生息が可能である。ヤマトシジミは汽水域に生息するが、広く深い河口を有する吉野川最下流域では、淡水と塩水の分離が生じやすく、海水性の貝類と近接して生息がみられたことであろう。

脊椎動物門　　Vertebrata

魚上綱　　Pisces

硬骨魚綱　　Osteichthyes

以下に示すように、沿岸外洋域から内海域、さらに汽水・淡水域に生息する種が主体となる目である硬骨魚綱が出土している。遺跡に近接する水域から外洋にかけての範囲で、これらの魚類が調達されたのであろう。魚類は土坑をはじめとする遺構群から、ある程度のまとまりをもって検出されている。特にSK4043より魚類遺存体とともに管状土錘19点が出土している点は特筆される。

スズキ目　　Perciformes

海水域から汽水・淡水域に生息する種が主体となる目である。16世紀末～17世紀後半の土坑 SK4043より尾椎（ANo. 12－５）が出土した。

スズキ科　　Percochthydae

スズキ　　*Lateolabrax japonicus*（Cuvier et Valenciennes）

沿岸海水域から汽水・淡水域の広い範囲に生息する種である。江戸時代にも広く親しまれた出世魚である。16～17世紀初頭の土坑 SP4127より、全長約65㎝程度と推定される右角骨（ANo. 33）が出土した。

タイ科　　Sparidae

マダイ　　*Pagrus major*（Temminck et Schlegel）

沿岸の岩礁性の内海域に多く生息する種で、回遊性の生態を持つ。16～17世紀初頭の遺構 SK4155より左上擬鎖骨（ANo. 6-4）、16世紀末～17世紀初頭の土坑 SK4043より、全長約50㎝と推定される右擬鎖骨（ANo. 13）が出土した。

アマダイ科　　Branchiostegidae

アマダイ属　　*Branchiostegus* sp. indet.

沿岸外海域に生息し、底層を遊泳することの多い種である。16世紀末～17世紀後半の土坑 SK4043より、全長約25㎝と推定される右主上顎骨（ANo. 12-3）が出土している。

フエフキダイ科　　Lethrinidae

フエフキダイ属　*Lethrinus*

暖流系の岩礁性海水域に多く生息する種である。16世紀末～17世紀後半の土坑SK4043より、右角骨（ANo.12-2）が出土した。

アジ科　Carangidae

ブリ　*Seriola quinqueradiata* Temminck et Schlegel

沿岸外海域に生息し、表層を遊泳する温帯性回遊魚。江戸時代も旬は冬期とされ、出世魚としても親しまれている魚種である。16世紀末～17世紀初頭の土坑SK4043より、体長約90～110cmの腹椎（ANo.11）が出土した。

鳥　綱　Aves

ニワトリを除けば多くは野生の鳥類であったと考えられる。ただし、タカ目は鷹狩りの主体として飼育されたワシタカ類の可能性がある。それ以外の鳥類は、鷹狩り等の狩猟の獲物であった可能性が高い。

キジ目　Galliformes

キジ科　Phasianidae

キジ属　Phasianidus sp. indet.

丘陵から平野にかけて生息するキジあるいはヤマドリと考えられる骨格が検出された。時期不明の遺構SK3229より左上腕骨（ANo.55）、17世紀初頭から18世紀末に属するSD3005より左大腿骨（ANo.2）、SK4077より右大腿骨（ANo.20）が出土した。

ニワトリ　*Gallus gallus domesticus* Brisson

飼育個体と考えられるニワトリが検出された。ニワトリが多く出土した様相は、徳島市新蔵町遺跡での様相と類似している（富岡・沖田2000）。新蔵町遺跡での出土の様相より、「（ニワトリの）屠殺利用文化が広く一般化していたと考えるべきである」と主張したことがあったが（富岡・沖田2000：pp.428-429）、中徳島町１丁目地点での様相はこの考えを補強するものであろう。ただし、利用はヒト・イヌのいずれかに限られるのか、あるいは両方に利用されたのかは、以前不明である。

SK3015より左中手骨（ANo.40-4）、左脛骨（ANo.39-2）、左足根中足骨（ANo.40-2）、SK3229より左足根中足骨（Ano.54）が出土した。

左脛骨（ANo.39-2）の骨幹部遠位部には切創（D1aタイプ）がみられ、解体されたことが明らかである。出土資料は四肢に限定されている。これはそれ以外の中軸骨格等と四肢が別々に消費・廃棄された可能性を示している。特に鳥類の骨格付きの肉を石臼様の道具で潰す料理法は江戸時代より昭和時代まで伝わったことが知られており、中軸骨格がそのような処理を経た可能性がある。これは他の鳥類も同様である。出土している骨格は硬骨部分に富んでおり、割ると針状になることから、粉砕して食用にするには危険な部分であったとも考えられる。

ガンカモ目　Anseriformes

ガンカモ科　Anatidae

マガンクラス　　Goose class

マガンの可能性のある骨格が出土した。本来は、野生のマガンのみではなく、飼育されているガチョウや野生のコクガンやシジュウカラガンである可能性があるが、近位端や第３中手骨部分が欠損していたため、特定できなかった。マガンであれば冬期に飛来する冬鳥、ガチョウであれば周年調達ができたものと考えられる。

SK2076より手根中手骨（ANo.62）が出土した。近位端に横断方向に切断された痕跡があり、解体されたことが明らかである。

カモ類Ａクラス　　wild ducks A class

16世紀～17世紀初頭のSP3059より左尺骨（ANo.57-2）、17世紀後半～18世紀前半のSK3015より左尺骨（ANo.40-5）が出土した。マガモ、カルガモ程度の体躯のカモ類と考えられ、冬鳥か留鳥の可能性がある。

カモ類Ｂクラス　　wild ducks B class

SP3059・SX1017・SK3015・SK3041・SK3006より上腕骨（ANo.35, 39-1, 40-1, 42-1, 42-2, 41-1, 41-2, 57-1, 60）、SK3041より右尺骨が検出された。カモ科の中では最も多く検出されたクラスである。オナガガモやホシハジロが含まれる可能性がある。徳島では冬鳥として知られ、秋から春に飛来することの多い種類である。出土資料のうち５点の骨格に切創が確認され、解体されたことが明らかである。

カモ類Ｃクラス　　wild ducks C class

18世紀後半～19世紀中葉のSX2010より右手根中手骨（ANo.59）が出土した。ヒドリガモ、ハシビロガモ、キンクロハジロが含まれる可能性がある。この種類も冬鳥である可能性が高い。

コウノトリ目　　Ciconiiformes

サギ科　　Ardeidae

平野から山地の水辺に生息する。17世紀後半～18世紀前半の遺構であるSK3015より、左足根中足骨（ANo.40-３）が出土した。大きさは、コサギ、ゴイサギ、ササゴイ、ミゾゴイ程度の体躯であると推定される。

タカ目　　Falconiformes

タカ科　　Accipitridae

タカ目と同定されたものは、17世紀前葉までに形成されたSK4055より右脛骨（ANo.10-2）と右上腕骨（ANo.10-1）、16世紀から17世紀初頭に形成されたSD3003より右尺骨（ANo.31-5）が検出された。

出土した脛骨と上腕骨は、タカ科に属するミサゴ、オオタカ、オオワシ、イヌワシ、ノスリ、ハイタカ、ツミ等とは異なり、トビにやや似ていたが、富岡研究室の標本や奈良文化財研究所松井研究室の標本と比較すると出土資料の方がやや小型であったことと、栄養孔の位置、遠位端関節部の形状が微妙に異なっていることから種の特定には踏み込まなかった。

尺骨は保存が不良であったため、ハヤブサ科かタカ科か特定出来ず、タカ目に同定を止めた。

哺乳綱　Mammalia
　ウシ目（偶蹄目）　Artiodactyla
　イノシシ科　Suidae
　　イノシシ類　*Sus scrofa* subsp. indet.

野生イノシシか家畜ブタか判別が困難なことから、双方を含むカテゴリーとして「イノシシ類」という分類名を利用する。徳島藩では、鹿狩りとともに猪狩りも盛んであったことが古文書より知られており、この資料もその獲物であった可能性が高い。

17世紀前葉までに形成されたSK4055より左肩甲骨（ANo.9-1）、17世紀後半より18世紀前半に形成されたSK3015より頭蓋頭頂骨（ANo.43）、時期不明のSX4009より右上腕骨（ANo.17）が出土した。

右上腕骨（ANo.17）の骨幹部には切創（cmD1aタイプ）が確認され、解体されたことが明確である。

　シカ科　Cervidae
　　ニホンジカ　*Cervus nippon* Temminck

出土したニホンジカには、やや大型のホンシュウジカクラスの個体と、四国で現在もみられる小型のキュウシュウジカクラスの個体がみられた。

16世紀より17世紀初頭に形成されたSK3066から左頭蓋（ANo.48）、右下顎骨（ANo.46）、前頭骨角突起（ANo.8）、右肩甲骨（ANo.44）、キュウシュウジカクラスの左下顎骨（ANo.45-2）、同時期のSK4079から角（ANo.19）、同時期のSP4092より右大腿骨（ANo.32-2）、17世紀初頭から18世紀前半に形成されたSK3093より右下顎骨（ANo.49-1）、同時期に形成されたSD3003より腰椎（ANo.28-1，28-2）、他にも16世紀から18世紀に形成された遺構群より左上腕骨（ANo.3、ANo.49-3、ANo. 56）、右上腕骨（ANo.9-2、ANo.14-1、ANo.22）、左橈骨（ANo.27）、右橈骨（ANo.14-2、ANo.21-2）、右尺骨（ANo.14-3）、左中手骨（ANo.49-2）、右中手骨（ANo.21-3、ANo.26）、右寛骨（ANo.30）、左大腿骨（ANo.16，23，24-1，37）、右大腿骨（ANo.21-1）、左脛骨（ANo.15-1，ANo.53）、右脛骨（ANo.7、ANo.25、ANo.29）、左中足骨（ANo.15-2）、右中足骨（ANo.38）、右肋骨（ANo.47）が出土している。

以上のように脊椎や指骨類が少なく、四肢骨が多く、頭蓋、特に鹿角がやや目立って出土しており、シカが部分的に切断された後、肉付きか骨格の状態で遺跡に搬入された可能性が考えられる。また、イヌの噛痕も多くみられ、イヌの餌になっていたことが判る。現代でもイヌ――特に猟犬――に哺乳類の椎骨は餌として与えられることが知られているので、この場合もそのように消費され、失われたのかもしれない。

　ウマ目　Perissodactyla
　ウマ科　Equidae
　　ウマ　Equus caballus Linnaeus

17世紀後半～18世紀前半にかけて形成されたSK3015から上顎第2・3切歯（ANo.42-3，42-4）が出土した。いずれも小窩が明確に成立しており、年齢階梯が等しいと考えられ、同一遺構から出土して

いるため、一個体に由来する可能性が高いであろう。全長より推定して、小型在来馬であったと考えられる。屋敷内で飼育していたウマに由来するものであろう。

ネコ目（食肉目）　Carnivora
　ネコ科　Feridae
　　イエネコ　*Felis catus* Linnaeus

16世紀～17世紀後半に形成されたSX3015より左上腕骨（ANo.5）、18世紀後半～末にかけて形成されたSX3002より左上腕骨（ANo.36）が出土した。切創は判別できず、解体されたのかは不明であるものの、ワシタカ類の餌や人間の食用に供された可能性がある。

　イヌ科　Canidae
　　イヌ　*Canis familiaris* Temminck

18世紀第4四半期～幕末に属する第1遺構面より上腕骨（ANo.66）、17世紀初頭～18世紀前半に形成されたSK3101より左下顎骨（ANo.50）、16世紀～17世紀後半までに形成されたSK3079より左上腕骨（ANo.51）、16世紀末～17世紀初頭の溝SD3003より同一個体に由来すると推定される左寛骨（ANo.24-3）と右寛骨（ANo.24-2）が出土した。下顎骨（ANo.50）の属性表に記した計測値は、全てDriesch（1976）に基づく。成獣にも関わらず下顎骨全長はわずか110㎜と小型柴犬程度の体躯であり、現代四国犬の標準的な値である135-148㎜よりも小さい。第1後臼歯より切歯にかけて下顎体先端がやや細い形態で、江戸時代のイヌに散見されるパターンの一つを示している。

これらのうち、左下顎骨と左上腕骨、左右寛骨に切創が残されており、ワシタカ類の餌や人間の食用に供されたものと推定される。切創が残されているいずれの資料とも、生類憐れみの令より以前のものである可能性が高い。

徳島藩は生類憐れみの令に素早く対応し、貞享2（1685）年正月25日に城下でのイヌ飼育に制限を加える法令【藩法令集、条文番号36】を出していることが、石尾（1998）による『藩法令集』の研究で指摘されている。生類憐れみの令が廃止された後にも、イヌ飼育には制限が課せられ、寛政5（1793）年の触れ【藩法令集、条文番号191】では野犬は非人に渡すこと、鹿犬――猟犬のタイプを示す可能性がある――等を飼う場合に「御鷹支配」へ申し出て許可を得る必要があると規定している。これは鷹狩りの主体となる鷹匠衆・餌指衆やその上司が、イヌ管理の権利を任されていたこと、非人が野犬管理・処理の権利を持っていたことをうかがわせる資料である。

また、出土資料の動物遺存体にイヌの噛み跡が多数みられる点も重要である。つまり、これは遺跡内でイヌに餌が与えられていた上に、イヌが遺跡内で処分・加工・処理をされたことを示すことになるからである。

ネズミ目（囓歯目）Rodentia
　ネズミ科　Muridae

SK4043より寛骨（ANo.12-4）が出土した。解体痕跡はなく、食料残滓ではなく、残滓をあさりに来たネズミ類が混入した可能性がある。

骨角製品

ヘラ　（ANo.64）

洋裁・和裁・皮革加工で用いられるヘラ（別名チャコ）が出土した。類例は兵庫津（兵庫県近世18世紀後半：松井章氏・丸山真史氏御教示による）と、博多遺跡群（福岡市1996）より出土している。全長14.385㎜、最大厚5.30㎜、最大幅23.80㎜。

素材は、哺乳類の四肢骨骨幹部と推定され、大きさや厚みから推定するとウシ・ウマの可能性が高い。柄部末端には花弁状の装飾が施され、かなり丁寧な仕上げである。先端には使用に伴う摩耗がみられ、製作時の傷も摩耗しており、さらに下緒が付けられていたためか、柄部の穿孔の端部寄は、摩滅が激しく、表面の彫刻による溝も失われており、使い込まれた道具であったことが明確である。

櫛払　（ANo.65）

素材は非常に緻密な組織を持つ角・硬骨・歯牙の可能性があるが、特徴的な縞状構造がないことから象牙ではない。櫛払としては極めて質の良い資料である。頭部にも植毛のための穿孔を途中で止めたような痕跡がみられ、また基部端部は硬く粗いものを擦った様な痕跡が面的に残され、不整形に変形している。

櫛払は化粧道具として作られたものと考えられるが転用された可能性もあろう。出土資料は久保（1999）による分類のⅤ類にあたる。このⅤ類は18～19世紀に属する近衛家・紀州徳川家・尾張徳川家の伝世資料にみられ、岡山城外堀にあたる天瀬遺跡からも類例（B２：杉山他2001：pp.62-65）が出土し、供伴遺物より19世紀頃に帰属すると推定され、伝世品の年代観と矛盾しない。中徳島町１丁目地点の資料も18～19世紀の所産の可能性が高いであろう。この年代観が正しいならば、中徳島町１丁目地点は蜂須賀家の屋敷であった時期であり、上級武士蜂須賀家に起居する者の持物であった可能性がある。

材質についての詳細な同定は本報告では断念している。これほどの良品の場合、材質同定において破壊分析は避けるべきであろう。CTスキャンによる非破壊分析が、成果を期待できる分析方法としてあげられる。

3　徳島城下町遺跡　中徳島町１丁目地点における動物質資源と環境

中徳島町１丁目地点において水域由来の動物質遺存体は、内湾から外海に生息する貝類と魚類によって構成され、鳥類は水域から陸上にかけて生息するカモ科、陸上の平野から山地に生息するキジ属・タカ目・飼育されていたニワトリによって構成され、哺乳類は陸に生息するもののみによって構成された。このうちほとんどの水産資源は、遺跡周辺に広がっていた干潮域の河口部とそれに接続する外洋で調達が可能であった。城に近接した立地ながら、今回の発掘では管状土錘が豊富に出土した上に、滑石製の錘鋳型も出土したことから、漁撈を行い、その道具を製作していた様子がうかがわれる。

人間の食料であった可能性が高いものは、貝類・魚類の全てと、鳥類ではカモ科、キジ属、ニワトリ、哺乳類ではニホンジカ・イノシシ類であろう。中でもニホンジカの出土量が多い点が目をひく。このような様相は、近接する同時期の新蔵町３丁目遺跡に類似する。これらの調達には、徳島藩で盛んであった鹿猟が機能していた可能性が高い。勿論、近畿圏と同様に骨格細工加工のための原料として流通した可能性も残されている。

動物遺存体の出土量は決して多くはないが、バリエーションは豊富で、いくつもの種類の食材を僅か

ずつ楽しんだ質素倹約を旨とする食卓が想像され、一時の豪奢な饗宴で食材が多量に浪費された趣はない。特に魚貝類が多量に出土した遺構は、16～17世紀にかけて残されたものが多く、中徳島町１丁目地点が侍屋敷から500石取り程度の藩士居宅として利用されていた時期にあたる。

中徳島町１丁目地点からは、動物遺存体とともに管状土錘がSK4043より19点出土し、別遺構からは把手形錘の鋳型も出土している。出土資料に類似性のみられる新蔵町３丁目遺跡でも、中徳島町１丁目地点と同様に全長５～８㎝の管状土錘が出土し、南常三島町常三島遺跡では武家屋敷から、これも中徳島町１丁目地点で出土した滑石製の錘鋳型が検出されている。以上の結果、徳島城下町遺跡で指摘できる武士の漁撈活動が城下で共通した内容を持ち、空間的広がりを持っていたことが解明できた。藩士が吉野川で漁をすることについて徳島藩が出した禁令（1777年）と考え合わせれば、17～18世紀中頃にかけて徳島城下の武士の間で網漁が盛んであったことは確実である。武士が狩猟や漁撈を楽しむことは江戸時代に広くみられた現象であり、武家屋敷や隣接地より土錘が出土した例は仙台城・江戸遺跡・岡山城二の丸および外堀でも知られ、徳島が特別という訳ではない。徳島藩士へ吉野川での禁漁の触れが出された18世紀に、中徳島町１丁目地点での魚類の出土量が減っているのは、出土魚類が武士の自家調達であったことと、居住者の法令の遵守意識が高かったことを示すのであろうか。

このように魚貝類のバリエーションに富む武士階級の廃棄物がみられた例は、破城儀式での饗宴跡と考えられた岡山県倉敷市下津井城出土一括資料の例があげられる（富岡2000）。下津井城資料は、破城儀式という特別な饗宴であるにも関わらず、やや貧弱な体躯の海水魚・海水性貝類が調達されていたことが奇異であったが、中徳島町１丁目地点の場合は、武士の自家調達による日常的な食事の残滓であると推定すれば、海浜部の武士居宅での倹約的日常風景を垣間見たことになるのであろう。この様相は、近接する新蔵町３丁目遺跡徳島保健所地点出土動物遺存体資料群と大きく異なっている。これは新蔵町遺跡での出土資料の主体が18世紀であることと関連する可能性がある。

鳥類や、哺乳類のイヌ・イエネコ等は、中徳島町１丁目地点が確実に武士居宅として利用された17～18世紀代の遺構・層位より検出されることが多く、魚貝類の出土状況と補完的であることからも、武士では上級の者とその家臣にのみ飼育が許された鷹狩用のワシタカ類の餌や獲物 ── 藩主より下賜された可能性を含む ── であった可能性が高い。特に動物遺存体の出土量が少ない第１遺構面の段階でイヌとカモ科Ｂクラスが出ていることはこの推定を支持するものと言えよう。これは、鷹狩りや鹿狩りが盛んに行われた徳島藩の当該期の有様を如実に伝える好資料とみることができる。

「生類憐れみの令」は徳島藩にも強い影響を与え、鷹狩りの停止やイヌ飼育禁止の実施が古文書からも知られている。「生類憐れみの令」が発布された17世紀末～18世紀初頭頃に、中徳島町１丁目地点出土動物遺存体の様相に画期がみられる点は、この社会的醸成の反映と捉えることができよう。特にニホンジカの出土量が激減する点は、注目に値する。

当時は、上級武士の間で鷹狩りが盛んに実施されていたことが知られ、身近な鳥類の一種と認識されるものの、特に近世にはワシタカ類の飼育について厳格な規制がもうけられ、鷹匠関連の遺跡であってもタカ目が出土する例は少なく、この資料は貴重な出土例といえる。ただし、注意を要する点は、鷹狩りの獲物であった可能性のある鳥類が集中的に出る時期よりも、この２例がやや古い時期の遺構から検出されている点である。これは、ワシタカ類の飼育がややルーズだった時期に遺体が軽くあしらわれていたのが、後に規制が強化されることで、遺跡内に遺棄・廃棄されることがなくなったとも考えられる。しかし、証明は困難である。

蜂須賀家は鷹場制度が整っていた大名としても知られ、元締めとして鷹奉行が２人、鷹匠が17，８人程、その下に擎手（すけまい）と呼ばれる助手がおかれ、参勤交代で江戸に上っても狩場を貸与され、徳島から鷹が移送されたという（本間1981：pp.205-206）。蜂須賀家が貸与された狩場は、徳川家の鷹場関連遺跡である葛西城址付近にあたる。この遺跡からは多量のイヌ・イエネコ類・カラス類が検出され、ワシタカ類への餌の残滓と考えられていることでも有名である（金子1975，1992，1994）。

中徳島町１丁目地点より南西約1.5kmに所在する富田には、鷹匠町と餌指町（鷹の餌を調達する役を餌指衆と呼ぶ）が設定され、国瑞神社北には鷹屋敷が設置されていた。中徳島町１丁目地点と新蔵町遺跡は、このような遺跡との比較分析とともに、文献研究を併せて実施すれば、近世鷹狩り文化の研究において基準資料となるであろう。ただし、中徳島町１丁目地点の場合出土した鳥類の種類は、鷹狩りを愛した５代藩主綱矩の鷹狩りの様子を記す古文書等より知られる獲物であるバン・ヒバリ・ツル類は含まれず――新蔵町遺跡ではツル科が出土している――、マガンさえも少なく、もっぱら小型のカモ科が主体として出土している点は注意が必要で、獲物の配分や消費・廃棄に階層性があった可能性は勿論、ワシタカ類への「日常の餌」と狩り場での「獲物」には大きな相違があった可能性も考慮していかなければならない。

4　動物遺存体の破損と解体加工技術

動物遺存体には刃器による様々な切創がみられた。刃器には刀子のように鋭角の切断面で被加工物を切る鋭利なタイプと、鋸のようにある程度の幅で被加工物を抉りながら切断するタイプがみられた。

切断の分類は第２表の通りである。

このうち、Aaタイプとした対象を完全に切断している切創は17世紀後半～18世紀前半に帰属するカモＢ類とした、やや小型のカモ科３点の上腕骨遠位端（ANo.39-1，42-1，35）に特徴的にみられた。これは、定型的な調理技法が施されていたことを示している。他にも時期不明のカモ科マガンクラスの手根中手骨（ANo.62）、時期不明のニワトリの足根中足骨（ANo.54）で同様のAaタイプの切創がみられた。

魚類では16世紀～17世紀後半のマダイの擬鎖骨（ANo.6-4，13）、16世紀～17世紀初頭のマダイの上擬鎖骨でもAaタイプの切創がみられた。いずれの骨格も頭部の後位にあたり、単純に体部の肉を食用にしたのでなく、頭部を切断し、食用としたことが推定される。

哺乳類にはAaタイプの切創が少なく、ニホンジカの角を残す頭蓋でのみみられた。

鋸での切断と推定されるA～Dの3cに分類される切創としては、３点がみられ、すべてニホンジカであった。B3cタイプの切創がニホンジカ角（ANo.58）にみられた。鹿角の成長方向を垂直に置いた場合、硬組織部分を切断するように横方向に平行な２条のB3cタイプの切創が残されている。この切断面の幅（あさり幅）は約1.85mmで、これは利用された工具の厚みを示しているものと推測される使用刃器が横引き鋸であったらしく、断面の凹みのピークが二峰をなしている。鋸は一方向からあてられて完全に対象を切断せずに中途で切断を停止している。二条の切断面で切り取られた立方体は高さ8.5mm、幅10.7×12.05mmであった。これは栗形の様な刀装具の失敗品かサイコロ（賽子）の様な立方体の形状のものを作ろうとした残欠であろう。２条の切創のうち上位の切創の断面を第８図に示す。

C3cタイプの切創は同じくニホンジカ角を伴う前頭骨角突起にみられ、D3cタイプは、ニホンジカ橈骨・尺骨（ANo.32-1）にみられた。この資料の切断面は多方向から鋸があてられており、鹿角資料

（ANo.58）でほぼ立方体の素材を切り取ろうとした場合と異なる。

中世の草戸千軒町遺跡（広島県福山市）や近世の天瀬遺跡（岡山県岡山市：富岡2001）ではニホンジカの角や中手・中足骨の加工品とともに多くの哺乳類遺存体が出土しており、中徳島町１丁目地点での破損の痕跡と類似した例もみられる。遺跡間の状況を比較すると、草戸千軒町遺跡ではより多くの骨角類の製品・未製品が出土しているが、中徳島町１丁目地点では、ごく限られた製品・未製品類が出土しているのみである。これは遺跡の持つ機能が異なっていたことを推定させる。最も類似性が高い遺跡は、近接する新蔵町３丁目遺跡徳島保健所地点出土動物遺存体資料群であろう（富岡・沖田2000）。出土した動物遺存体は、中徳島町１丁目地点ではやや魚種が多く、新蔵町遺跡では鳥類にヒシクイとツル科が含まれていたという違いがあるものの、哺乳類は新蔵町遺跡でのみウシが出ているものの、それ以外は共通している。特に切創を多量に残すイヌ遺存体がみられる点、イヌの噛み跡を残す哺乳類がみられる点、鋸引きをして切断したニホンジカの角が出ている点は、特筆すべき類似点であろう。

最も多い切創は、鋭利な刃器で骨から筋肉を切り剥がす際に残された切創と推定されるC～D1aタイプである。魚類では硬骨魚綱目不明の背鰭骨あるいは臀鰭棘（ANo.6-1）、鳥類ではカモ科、キジ属、ニワトリ、哺乳類ではイノシシ類、ニホンジカ、イヌの四肢骨を主とした骨格にこのタイプの切創がみられ、遺跡内や隣接地で解体処理が行われたものと考えられる。なかでも鳥類はAaタイプの切創がみられた骨格と種類が類似することと切創の位置も似ることから、AaタイプとB～C1aタイプの切創は類似した解体工程で残された可能性が考えられる。

第１－１－１表　破損分類基準（アンダーラインが付された部分が分類名）

<table>
<tr><td colspan="3">規則性の高い創傷：ヒトによる加工の可能性</td></tr>
<tr><td colspan="2">Aタイプ　切断（対象を完全に切断している切創：cut mark）</td><td rowspan="4">a　溝面が平滑あるいはゆるやかなカーブ
（含：刃こぼれの傷）
切創・切削痕跡：
cut or scrape mark

b　溝片面が破断
打撃叩切痕跡：
chop or huck mark

c　断面に多数の平行線状痕跡
鋸引痕跡：　saw mark</td></tr>
<tr><td rowspan="3">Bタイプ　切創（５㎜以上の深さ）

Cタイプ　切創（１～５㎜の深さ）

Dタイプ　切創（１㎜未満の深さ）</td><td>1　線状に伸びた痕跡</td></tr>
<tr><td>2　刺突状に止まった痕跡</td></tr>
<tr><td>3　水平に刃器を滑らせたスリップ・振動した痕跡を留めるもの</td></tr>
<tr><td colspan="3">規則性のやや低い創傷：spタイプ　spiral fracture　螺旋状の割れ
（骨が適度な柔軟性と剛性を維持していた段階で生じた創傷）</td></tr>
<tr><td colspan="3">規則性の低い創傷：動物による損壊の可能性</td></tr>
<tr><td colspan="3">局部的かつ集中的にクレーター状や断面半円の孔・溝を生じる　→　yタイプ
（日本の多くの遺跡の場合は、大きさからイヌあるいはオオカミによるものと考えられる）
二条の溝が一対になり、局部的に損壊される　→　zタイプ
（日本の多くの遺跡の場合は、大きさからネズミ類等のゲッ歯目によるものと考えられる）</td></tr>
<tr><td colspan="3">新しい切創：　偽切創</td></tr>
</table>

5　徳島城下町遺跡　中徳島町１丁目地点における骨角細工の様相

以上で述べてきた骨角製品には、素材、製品、未製品がみられることから、この遺跡で製品が使われただけではなく、溝の延長上のいずれかの場所にこのような骨角製品を製作する工房が存在した可能性が高い。近世都市には、刀装具等の武具や日常雑器、装身具、果てはサイコロといった骨角製品を製作する骨角細工工房が存在したことは、既に江戸・京都・大阪・博多の調査から推定されている。徳島城に隣接する中徳島町１丁目地点の周辺にもこのような骨角細工工房が存在していたことと考えられる。特に17世紀前半頃の侍屋敷時代に、徳島城下の武士が江戸や大坂と同じように副業でこのような細工工房を営みはじめていた可能性がある。一方、ヘラ・櫛払はともに極めて良好な質であり、かつ使い込まれた製品であることから、17世紀後半以降にこの遺跡の主体である上流武士層の持物の可能性もある。

久保(1999)等による大阪市域での近世骨角細工の研究によりこの分野の理解が深められた。これによると、大阪では原材料は牛馬骨に限られ、なかでも成獣の骨格が大半を占めること、原材料から仕上げまでを行うものの他に、分業化したシステムが存在し、17世紀第１四半期までは町場の外縁や開発の程度が低い地点にあったものが、第２四半期以降には町場の中でも認められるようになったことが明らかにされた。一方、京都では近世初期より、骨細工が町場内に立地していることが指摘されている。

中徳島町１丁目地点も、18世紀以降には上流武士の居宅の遺跡であるが、加工痕跡を残す動物遺存体は16世紀末から17世紀以降の遺構で検出されており、京都と同様に町場内に骨角製品の工房が形成されていたとみるべきであろう。また、原材料については、ニホンジカについては全ての体躯が遺跡内に持ち込まれたのではなく、骨角製品に加工しやすい素材が選択的に持ち込まれていたことが、出土した骨格の種類から推定され、骨角製品原材料の流通機構が既に成立していた可能性さえ考えられる。

謝辞

徳島県埋蔵文化財センター各位には資料の提供とともに様々な御教示・御援助を頂いた。徳島県文書館の各位には、鷹狩り関連の古文書の御教示を賜った。また、出土資料分析にあたっては、岡山理科大学谷村彩さん、藤路藍さん、畑山智史君、岡山理科大学卒業生藤田芙美さん、京都大学大学院丸山真史氏の御協力を得た。さらに、東北大学須藤隆先生、奈良国立文化財研究所松井章先生、国立歴史民俗博物館西本豊弘先生に比較標本の提供と御助言・御教示を頂いた。記して感謝の意を表します。

参考文献

阿部　永他　1994　『日本の哺乳類』(東海大学出版局)

阿部宗明　1987　『原色魚類大図鑑』(北隆館)

石尾和仁　1998　「徳島城下町における都市生活の一断面　－『藩法令集』に見る－」『新蔵町１丁目遺跡合同庁舎地点　徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第18集』：pp.198-205

今泉吉典、岡田弥一郎　1983　『学研生物図鑑　動物』(学研)

内田　亨　1979　『新編日本動物図鑑』(北隆館)

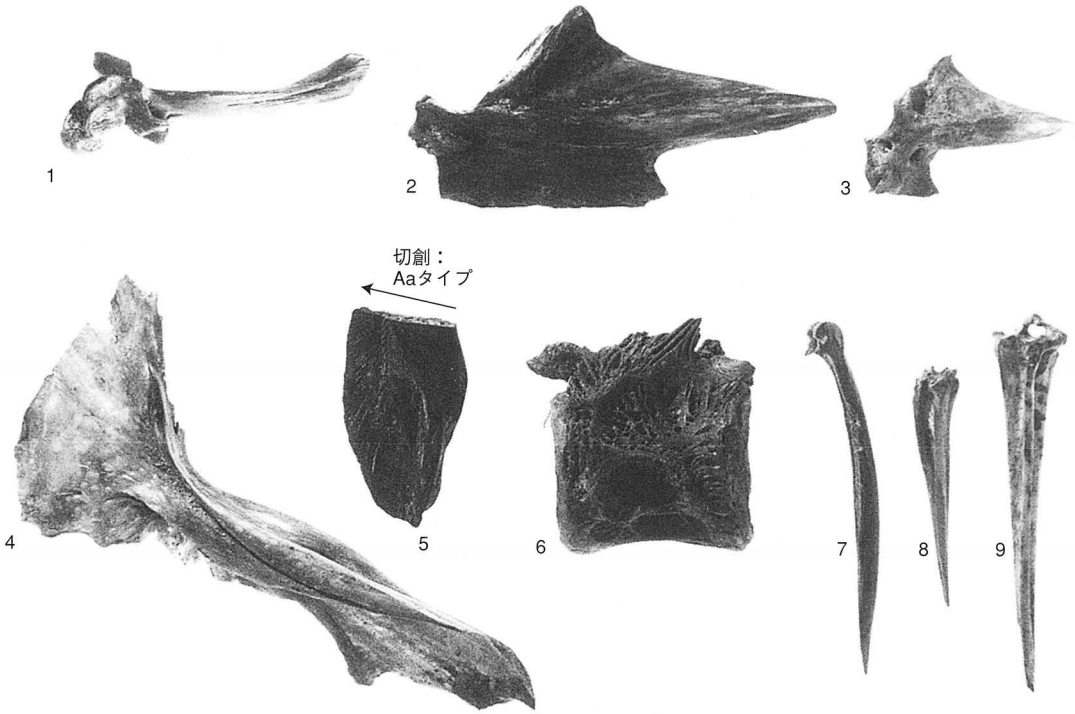
内田　亨他　1972　『谷津・内田　動物分類名辞典』(中山書店)

大泰司紀之　1980　「遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別・年齢・死亡季節査定法」『考古学と自然科学』13：pp.51-74

大泰司紀之　1983　「シカ」　『縄文文化の研究２生業』pp.122-135

大泰司紀之　1984　「ニホンジカの比較骨学および地理的時代的変異」『古文化財の自然科学的研究』　pp.555-558

岡田　要（校閲）　今泉吉典(著)　1960　『原色日本哺乳類図鑑』（保育社）
岡田　要　内田清之助　内田　亨　1965　『新日本動物図鑑』下（北隆館）
金子浩昌　1975　「東京都葛飾区青戸葛西城址Ⅳ・Ⅴ区濠出土の動物遺体」『青戸葛西城址調査報告』Ⅲ（葛飾区・葛西城址調査会）
金子浩昌　1990　「山上会館・御殿下記念館出土の動物遺存体」『東京大学本郷構内の遺跡、山上会館・御殿下記念地点』（東京大学埋蔵文化財調査室）：pp.244-461
金子浩昌　1992　「江戸時代の動物質食料　－江戸の街から出土した動物遺体からみた－」『江戸の食文化』（吉川弘文館）：pp.220-243
金子浩昌　1994　「葛西城址出土の動物遺体の研究」『葛西城』ⅩⅧ（葛飾区）
蒲原稔治　1966　『標準原色図鑑全集　第４巻　魚』（保育社）
久保和士　1999　『動物と人間の考古学』（真陽社）
小池裕子、大泰司紀之　1984　「遺跡出土ニホンシカの齢構成からみた狩猟圧の時代変化」『古文化財の自然科学的研究』　pp.508-517
小池裕子、林　良博　1984　「遺跡出土ニホンイノシシの齢査定について」『古文化財の自然科学的研究』　pp.519-524
後藤仁敏、大泰司紀之編　1986　『歯の比較解剖学』（医師薬出版株式会社）
高野伸二　1982　『フィールドガイド日本の野鳥』（日本野鳥の会）
富岡直人　1998　「岡山城二の丸跡出土の動物遺存体」『中国電力内山下変電所建設に伴う調査報告岡山城二の丸跡』pp.136-163
富岡直人　2000　「岡山県倉敷市下津井城跡・破城時に廃棄された動物遺存体」『倉敷埋蔵文化財センター年報』８：pp.53-65
富岡直人・沖田絵麻　2000　「徳島県新蔵町３丁目遺跡出土動物遺存体」『新蔵町３丁目遺跡徳島保健所地点、徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第31集』：pp.427-438
富岡直人　2001　「岡山県天瀬遺跡出土動物遺存体の分析」『岡山県埋蔵文化財調査報告書154、天瀬遺跡・岡山城外堀跡』（岡山県教育委員会）：pp.89-121
富岡直人　2003　「岡山城二の丸跡出土の動物遺存体の分析」『岡山城二の丸跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告175：pp.177-193
富岡直人　2004　「動物遺存体の分析」『平安京北辺四坊　京都市埋蔵文化財研究所調査報告書　第22冊』（財団法人京都市埋蔵文化財研究所）：pp.342-356
林　壽郎　1968　『標準図鑑全集　動物Ⅰ』（保育社）
林　壽郎　1968　『標準図鑑全集　動物Ⅱ』（保育社）
福岡市教育委員会　1996　『博多51　博多遺跡群第80次調査報告』（福岡市教育委員会）
本間清利　1981　『御鷹場』（埼玉新聞社）
松井　章　2004　「草戸千軒町遺跡第36次調査出土の動物遺存体」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告２』（広島県草戸千軒町遺跡発掘調査研究所）：pp.343-364
松井　章　2003　「歴史時代の動物考古学」『環境考古学マニュアル』（同成社）：pp.201-209
Driesch, Angela 1976 “A Guide to the Mesurement of Animal Bones from ArchaeologicalSites” Peabody Museum Bulletin 1, Museum of Archaeology, Harvard University

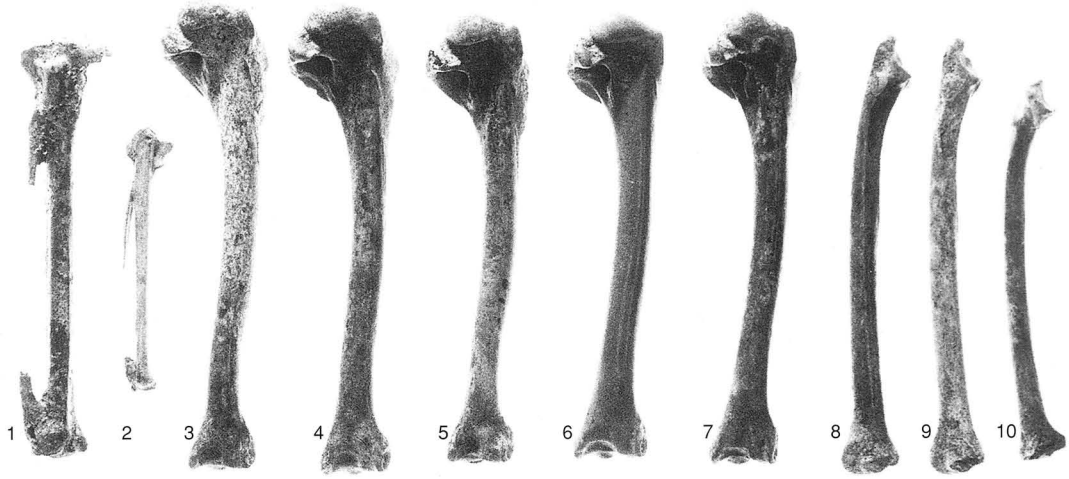


第１図　徳島城下町遺跡　中徳島町１丁目地点出土魚類

１．アマダイ属　主上顎骨(ANo.12-3)、２．スズキ　角骨(ANo.33)、３．フエフキダイ属　角骨(ANo.12-3)、４．マダイ　擬鎖骨(ANo.13)、５．マダイ上擬鎖骨(ANo.6-4)、６．ブリ　腹椎(ANo.11)、７．目不明　背臀鰭棘(ANo.6-1)、８．９．目不明　担鰭骨（ANo.12-1, 1）

第２図　徳島城下町遺跡　中徳島町１丁目地点出土鳥類

１．タカ目　尺骨R(ANo.31-5)、２．タカ科　♂　脛骨R(ANo.10-2)、３．タカ科　上腕骨R(ANo.10-1)、４．キジ属　上腕骨L(ANo.55)、５．キジ属　大腿骨R(ANo. 20)、６．ニワトリ脛骨L(ANo. 39-２)、７．ニワトリ　♂　足根中足骨L(ANo.54)、８．ニワトリ　足根中足骨L(ANo.40-4)、９．ニワトリ　足根中足骨Ｌ遠位部＋遠位端(ANo.40-2)、10. サギ科　足根中足骨Ｌ(ANo.40-3)



第３図　徳島城下町遺跡　中徳島町１丁目地点出土鳥類

１～９．カモ科　１．マガンクラス中手骨Ｌ(ANo.62)、２．カモＣクラス　中手骨Ｒ(ANo.59)、３～７．カモＣクラス　上腕骨Ｒ(３．ANo.42-2，４．ANo.60，５．ANo.57-1，６．ANo.35，７．ANo.41-1) ８．カモＡクラス　尺骨Ｌ(ANo.40-5)、９．カモＡクラス　尺骨Ｌ(ANo.57-2)、10．カモＢクラス　尺骨Ｒ(ANo.41-2)

第４図　徳島城下町遺跡　中徳島町１丁目地点出土哺乳類

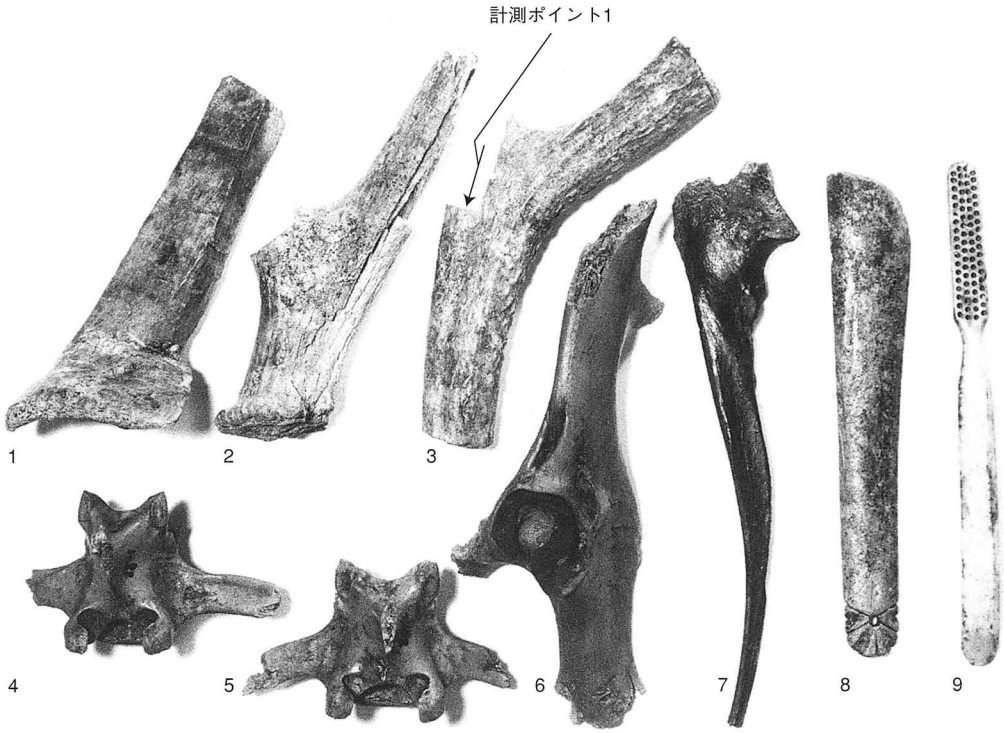
１．イヌ　下顎骨Ｒ(ANo.50)、２．イヌ　寛骨Ｌ(ANo.24-3)、３．イヌ　上腕骨Ｒ遠位部＋遠位端(ANo.66)、４．イヌ　上腕骨Ｌ(ANo.51)、５．イエネコ　上腕骨Ｌ(ANo.5)、６．イエネコ　上腕骨Ｌ(ANo.36)、７．ネズミ科　寛骨Ｌ(ANo.12-4)

第５図　徳島城下町遺跡　中徳島町１丁目地点出土哺乳類

１．イノシシ　頭蓋 LR(ANo.43)、２．イノシシ　第Ⅲ中手骨 L(ANo.4)、３．イノシシ　肩甲骨 L(ANo.9-1)、４．ウマ　第２切歯（ANo.42-3)、５．ウマ　第３切歯(ANo.42-4)、６．ニホンジカ　頭蓋 L(ANo.48)、７．ニホンジカ　下顎骨 R(ANo.46)、８．ニホンジカ　下顎骨 L(ANo.45-2)、９．ニホンジカ　下顎骨 R(ANo.49-1)

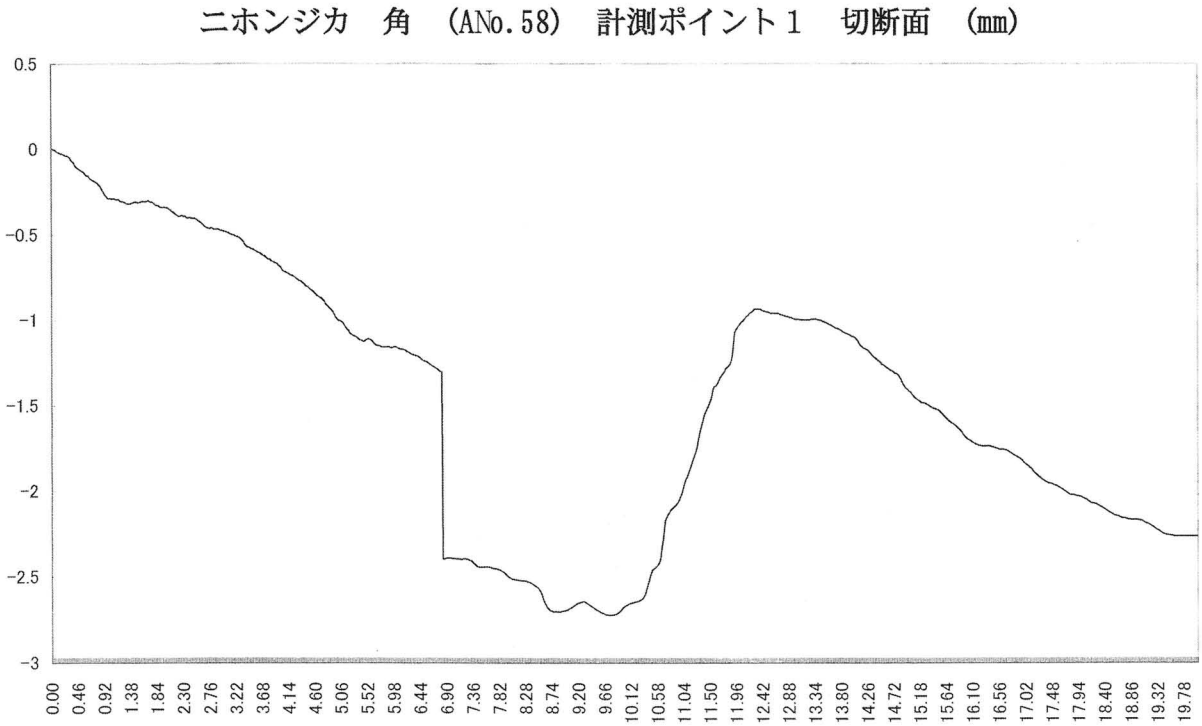
第６図　徳島城下町遺跡　中徳島町１丁目地点出土哺乳類

ニホンジカ　脛骨 L1～3、R4.5、１．(ANo.15-1)、２．(ANo.31-1)、３．(ANo.53)、４．(ANo.25)、５．(ANo.29)



第７図　徳島城下町遺跡　中徳島町１丁目地点出土哺乳類

１～７．ニホンジカ　１．頭蓋R(ANo.8)、２．角L(ANo.19)、３．角L(ANo.58)、４．腰椎(ANo.28-1)、５．腰椎(ANo.28-2)、６．寛骨L(ANo.30)、７．尺骨R(ANo.14-3)、８．骨製ヘラ(ANo.64)、９．櫛払(ANo.65)



第８図　徳島城下町遺跡　中徳島町１丁目地点出土ニホンジカ　角　(ANo.58)　切創断面図

(計測は岡山理科大学　富岡研究室　微小部計測システム：　レーザー変位測定器による　単位mm)

番号	No.	遺物 No.	遺構名	区	地区	層位	時代	大分類	小分類	部位	LR	部分	成長度	破損	色調	風化	測定値	備考
6	7	ANo. 6-2	SK4155	4	K-13	第４遺構面	16c-17c 初頭	硬骨魚綱	目不明	不明	?	完形	不明	なし？	茶褐色	なし		
15		ANo. 12-1	SK4043	3	H-3	第４遺構面	～17c 後半	硬骨魚綱	目不明	担鰭骨	M	完形	不明	なし	茶褐色	viv		
1	1	ANo. 1	SD3005	1	E,F-6	第３遺構面	17c 初頭-18c 末	硬骨魚綱	目不明	担鰭骨	M	完形(近位端一部欠損)	不明	なし？	茶褐色	viv		
	6	ANo. 6-1	SK4155	4	K-13	第４遺構面	16c-17c 初頭	硬骨魚綱	目不明	背腎鰭棘	M	完形	不明	cm(D1a 骨幹部)	茶褐色	なし		
14	7	ANo. 11	SK4043	3	H-3	第４遺構面	～17c 後半	硬骨魚綱	ブリ	腹椎	M	椎体	不明	なし？	茶褐色	viv	BFcr:20.45	
56	8	ANo. 33	SP4127	3	H-4	第４遺構面	16c-17c 初頭	硬骨魚綱	スズキ	角骨	R	完形	?	なし	茶褐色	viv	関節最大幅7.30、GL:57.35	
19	9	ANo. 12-5	SK4043	3	H-3	第４遺構面	～17c 後半	硬骨魚綱	スズキ目	尾椎	M	椎体	不明	なし	茶褐色	viv		
16	10	ANo. 12-2	SK4043	3	H-3	第４遺構面	～17c 後半	硬骨魚綱	フエフキダイ属	角骨	R	完形	不明	なし	茶褐色	なし		
17	11	ANo. 12-3	SK4043	3	H-3	第４遺構面	～17c 後半	硬骨魚綱	アマダイ属	主上顎骨	R	完形	不明	なし？	茶褐色	viv		
98	12	ANo. 61	SX1019	4	L, M-10, 11	第１遺構面	17c-19c 中葉	硬骨魚綱	タイ科	尾椎	M	完形(神経棘＋血管棘一部欠損)	不明	なし	茶褐色	viv	BFcr:11.90	
7	8	ANo. 6-4	SK4155	4	K-13	第４遺構面	16c-17c 初頭	硬骨魚綱	マダイ	上擬鎖骨	L	下位	不明	cm(Aa 骨幹部)	暗褐色	なし		
20	9	ANo. 13	SK4043	3	H-3	第４遺構面	～17c 後半	硬骨魚綱	マダイ	擬鎖骨	R	完形(後位一部欠損)	不明	cm(Aa 後位)	ノーマル	なし		
9	10	ANo. 8	SK4155	4	K-13	第４遺構面	16c-17c 初頭	哺乳綱	ニホンジカ	前頭骨	R	角突起	f 途上	cm(C3c, 全面)	茶褐色	viv		
82	11	ANo. 48	SK3066	3	K-5	第３遺構面	16c-17c 初頭	哺乳綱	ニホンジカ	頭蓋	L	前頭骨　頭頂骨	縫合未了	sp	茶褐色	なし		♀
67	12	ANo. 40-3	SK3015	3	F-3	第３遺構面	17c 後半-18c 前半	鳥綱	サギ科	足根中足骨	L	完形	p, d : f	なし	茶褐色	viv	GL:76.15、Bd:9.95、Bp:10.05、SC:4.05	コサギ・ゴイサギ程度の体躯
69	13	ANo. 40-5	SK3015	3	F-3	第３遺構面	17c 後半-18c 前半	鳥綱	カモＡクラス	尺骨	L	完形	d, p : f	なし	茶褐色	viv	GL:87.50、Bp:9.90、Dip:12.90、Did:11.70、SC:5.35	
95	14	ANo. 57-2	SP3059	3	G-4	第３遺構面	16c-17c 初頭	鳥綱	カモＡクラス	尺骨	L	完形	d, p : f	なし	茶褐色	viv	GL:86.45、Bp:10.00、Did:11.00、SC:5.20、Dip:13.00	
71	15	ANo. 41-2	SK3041	3	G-3	第３遺構面	17c 初-18c 前半	鳥綱	カモＢクラス	尺骨	R	完形	d, p : f	偽切創？骨幹部	茶褐色	なし	GL:75.25、Bp:9.65、Dip:11.70、Did:10.10、SC:5.05	CD ベルト西半分
63	16	ANo. 39-1	SK3015	3	E, F-3, 4	第３遺構面	17c 後半-18c 前半	鳥綱	カモＢクラス	上腕骨	L	完形	d, p : f	cm(Aa？遠位端)	茶褐色	viv	GL:90.60、Bp:22.00、Bd:13.65、SC:6.00	
72	17	ANo. 42-1	SK3015	3	E, F-3, 4	第３遺構面	17c 後半-18c 前半	鳥綱	カモＢクラス	上腕骨	L	完形	d, p : f	cm(Aa？遠位端外側)	茶褐色	viv	GL:90.25、Bp:19.50、Bd:13.75、SC:6.75	41-2と同一個体
65	18	ANo. 40-1	SK3015	3	F-3	第３遺構面	17c 後半-18c 前半	鳥綱	カモＢクラス	上腕骨	L	近位端＋骨幹部	p : f	sp	茶褐色	viv	Bp:20.85	
59	19	ANo. 35	SK3006	1	C-6	第３遺構面	17c 初頭-18c 前半	鳥綱	カモＢクラス	上腕骨	R	完形	d, p : f	cm(Aa 遠位端前位)	茶褐色	viv	GL:89.10、Bp:20.10、Bd:15.25、SC:7.85	
73	20	ANo. 42-2	SK3015	3	E, F-3, 4	第３遺構面	17c 後半-18c 前半	鳥綱	カモＢクラス	上腕骨	R	完形	d,p : f	cm(D1a 骨幹部遠位部、Aa 遠位端)	茶褐色	viv		42-1と同一個体
94	21	ANo. 57-1	SP3059	3	G-4	第３遺構面	16c-17c 初頭	鳥綱	カモＢクラス	上腕骨	R	完形	d, p : f	cm(D1a 骨幹部近位部)	茶褐色	viv	GL:89.75、Bp:20.15、Bd:13.45、SC:6.20	
70	22	ANo. 41-1	SK3041	3	G-3	第３遺構面	17c 初頭-18c 前半	鳥綱	カモＢクラス	上腕骨	R	完形	d, p : f	なし	茶褐色	なし	GL:90.15、Bp:19.50、BD:13.65、SC:6.70	CD ベルト西半分
97	23	ANo. 60	SX1017	4	J, K-14, 15	第１遺構面	18c 後半-19c 中葉	鳥綱	カモＢクラス	上腕骨	R	完形	d, p : f	なし？	茶褐色	なし	GL:94.40、Bp:21.40、Bd:14.00、SC:6.85	

番号	No.	遺物 No.	遺構名	区	地区	層位	時代	大分類	小分類	部位	LR	部分	成長度	破損	色調	風化	測定値	備考
96	24	ANo.59	SX2010	2	C-15	第２遺構面	18c 後半-19c 中葉	鳥綱	カモＣクラス	手根中手骨	R	完形（MCⅢ一部欠損）	d,p:f	なし	茶褐色	銅の錆（緑青）の影響で緑色化	GL:53.30、Bp:9.90、Did:6.00、L:52.10	銅の錆（緑青）の影響で緑色化
99	25	ANo.62	SK2076	4	L-13	第２遺構面	18c 後半-18c 末	鳥綱	マガンクラス	手根中手骨	L	完形（近位端、MCⅢ一部欠損）	d,p:f	cm（Aa 近位端）	茶褐色	viv	Did:11.10	
92	26	ANo.55	SK3229	4	M-13	第３遺構面	不明	鳥綱	キジ属	上腕骨	L	完形	d,p:f	cm（D1a 遠位端外側、近位端内側）	茶褐色	なし	GL:76.20、Bp:20.45、Bd:17.15、SC:7.65	
2	2	ANo.2	SD3005	1		第３遺構面	17c 初頭-18c 末	鳥綱	キジ属	大腿骨	L	完形（近位端一部欠損）	d,p:f	なし？	茶褐色	viv	SD:6.50、Bd:13.90	
32	3	ANo.20	SK4077	3	M-4	第４遺構面	16c-17c 初頭	鳥綱	キジ属	大腿骨	R	完形（一部欠損）	p,d:f	なし？	茶褐色	viv	GL：85.75、GLC：82.65、Bp：16.75、Bd:15.40、SD:7.15	
66	4	ANo.40-2	SK3015	3	F-3	第３遺構面	17c 後半-18c 前半	鳥綱	ニワトリ	足根中足骨	L	遠位端＋骨幹部	d:f	なし？	茶褐色	viv	Bd:18.25	
91	5	ANo.54	SX3229	4	M-13	第３遺構面	不明	鳥綱	ニワトリ	足根中足骨	L	完形（近位端一部欠損）	d,p:f	cm（Aa 前位のみ、D3a 骨幹部近位部前位）	茶褐色	viv	GL:82.10、Bp:復元値13.45、Bd:13.60、SC:7.40	♂、オナガドリより小さい
64	6	ANo.39-2	SK3015	3	E,F-3,4	第３遺構面	17c 後半-18c 前半	鳥綱	ニワトリ	脛骨	L	遠位端＋骨幹部	d:f	cm（D1a 骨幹部遠位部右内側）	茶褐色	viv	Bd:13.20	オナガドリ♂程度
68	7	ANo.40-4	SK3015	3	F-3	第３遺構面	17c 後半-18c 前半	鳥綱	ニワトリ	手根中手骨	L	完形	d,p:f	なし	茶褐色	viv	GL:82.15、Bp:14.15、Bd:13.90、SC:7.25	♀
13	14	ANo.10-2	SK4055	1,3	K-5	第４遺構面	～17c 前葉	鳥綱	ハヤブサ科	脛骨	R	完形	p,d:f	不明	茶褐色	viv	GL:84.00、La:83.10、Dip:12.55、Dd:7.70	
53	15	ANo.31-5	SD3003	3	E-4	第３遺構面	16c-17c 初頭	鳥綱	タカ目	尺骨	R	近位端＋骨幹部	p:f	なし？	茶褐色	viv	Dip:14.80、Bp:14.22	
12	13	ANo.10-1	SK4055	1,3	K-5	第４遺構面	～17c 前葉	鳥綱	タカ科	上腕骨	R	完形	p,d:f	cm（D3c 骨幹部）	茶褐色	viv	GL:122.55、Bp:23.40、Bd:20.25、SC:8.95	
	14	Ano.65	SK1023	3		第１遺構面	18ｃ末～19ｃ全般	哺乳綱	目不明	不明	?	骨幹部	不明	擦痕・ミガキ	淡褐色	黒斑	残存長:150.20	櫛払い：握り部断面八角形、ハケ部断面変形六角形
	15	Ano.64	第１遺構面	2	C-12	第１遺構面	18c	哺乳綱	目不明	不明	?	骨幹部	不明	擦痕・ミガキ・沈線・貝殻状剥離	淡褐色	銅の錆（緑青）の影響で緑色化	残存長:144.20	片刃ヘラ：使用されて摩耗・小さい剥離を起している。基部に４弁の花弁様彫刻が施されている。
41	16	ANo.24-4	SD3003	3	F-4	第３遺構面	16c-17c 初頭	哺乳綱	目不明（小～中型）	不明	?	骨幹部	不明	不明	茶褐色	なし		
10	11	ANo.9-1	SK4055	3	J-5	第４遺構面	～17c 前葉	哺乳綱	イノシシ類	肩甲骨	L	遠位端＋骨幹部	d:f	cm（D1a 骨幹部外側、Y 後位）	茶褐色	viv	SLC：31.05、GLP：42.10、BG：28.65、LG:33.05	
27	12	ANo.17	SX4009	3	I-4	第４遺構面	不明	哺乳綱	イノシシ類	上腕骨	R	骨幹部＋遠位端	p:uf,d:f	cm（D1a 骨幹部）	暗褐色	viv	GL:175.00、Bd:46.20、BT:34.70、SD:19.35	
4	4	ANo.4	SK4110	1	E,G-8	第４遺構面	不明	哺乳綱	イノシシ類	中手骨	L	近位端＋骨幹部	d:uf,p:f	なし？	茶褐色	viv	Bp:(15.60)	
76	5	ANo.43	SK3015	3	E,F-3	第３遺構面	17c 後半-18c 前半	哺乳綱	イノシシ類	頭蓋	LR	頭頂骨	uf（前位）	cm（Y 後位）	茶褐色	なし	DRIESCH(40):29.20	頭頂部の空隙がなく、骨髄が充満している
77	6	ANo.44	SK3066	3	K-5	第３遺構面	16c-17c 初頭	哺乳綱	ニホンジカ	肩甲骨	R	遠位端＋骨幹部	d:f	cm（D1a 右外側骨10条、D3a 幹部前位、Y 近位部）	茶褐色	viv	GLP：39.15、LG：29.90、BG：29.50、SLC:23.30	
48	7	ANo.30	SD3003	3	D,E-4	第３遺構面	16c-17c 初頭	哺乳綱	ニホンジカ	寛骨	R	腸骨一部欠損　坐骨一部欠損　恥骨一部欠損	f	cm（Y 腸骨、坐骨、恥骨）	茶褐色	viv	LA：35.00、LAR：32.15、SH：21.15、SB:9.90	

番号	No.	遺物 No.	遺構名	区	地区	層位	時代	大分類	小分類	部位	LR	部分	成長度	破損	色調	風化	測定値	備考
24	8	ANo.15-1	SX4009	3	I-4	第4遺構面	不明	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	L	骨幹部＋遠位端	d:f,p:uf	cm(D1a 骨幹部外側,幅11mm～)	暗褐色	viv	残存全長:221.55、SD:16.35、Bd:29.40、Dd:23.25	14-1、14-3と同一個体
90	9	ANo.53	SK3229	4	M-13	第3遺構面	不明	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	L	完形（一部欠損）	d:f p;uf	cm(D1a 左側面近位部2定程度、D3a 骨幹部前位後位)	ノーマル	viv	Bd:32.55、SD:19.05、Dd:25.45	
49	10	ANo.31-1	SD3003	3	E-4	第3遺構面	16c-17c 初頭	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	L	骨幹部＋遠位端	d:f	cm(Y 近位部)	茶褐色	viv	Bd:31.35、SD:21.25、Dd:25.00	
57	11	ANo.34-1	第4包層	3	H,I-4,5			哺乳綱	ニホンジカ（キュウシュウジカクラス）	脛骨	L	近位端＋骨幹部	p:f	sp(骨幹部),cm(D1a 後位)	茶褐色	viv	Bp:48.10、SD:18.20	
8	9	ANo.7	SK4001	4	K-13	第4遺構面	16c-17c 初頭	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	R	骨幹部＋遠位端	d:f	cm(C1a 骨幹部前位内側)	茶褐色	なし	SD:17.70、Bd:30.70、Dd:24.00	
42	10	ANo.25	SD3003	3	D,E-4	第3遺構面	16c-17c 初頭	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	R	完形	d,p:f	cm(D1a 骨幹部近位部遠位部後位、Y 近位端)	茶褐色	なし	Dd:25.40、Bd:33.65、SD:20.00、GL:270.85、Ll:252.20	
47	11	ANo.29	SD3003	3	F-4	第3遺構面	16c-17c 初頭	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	R	骨幹部＋遠位端	d:f	cm(Z)	茶褐色	viv	SD:18.25残存全長:222.70	
80	12	ANo.46	SK3066	3	K-5	第3遺構面	16c-17c 初頭	哺乳綱	ニホンジカ	下顎骨	R	筋突起＋関節突起	f(関節突起)	cm(D1a 前位外側12条)	茶褐色	viv		
83	13	ANo.49-1	SK3093	3	M-4	第3遺構面	17c 初頭-18c 前半	哺乳綱	ニホンジカ	下顎骨	R	下顎体下顎＋臼歯部 M1△2○3○	M3:小窩独立、M2:小窩独立	なし？	茶褐色、一部灰白色部分火を受けて劣化	viv	M3L:24.20、M3B:11.00、M2L:18.10、M2B:11.00	
79	14	ANo.45-2	SK3066	3	K-5	第3遺構面	16c-17c 初頭	哺乳綱	ニホンジカ（キュウシュウジカクラス）	下顎骨	L	切歯部＋下顎体＋前臼歯 (I1△2△3△4△C△P2○3○4○M1×)	P2:全面窩、P3:小窩連結、P4:小窩連結,2.5歳以上(萌出による)	cm(D1a 舌側)	茶褐色	viv	(9):31.25、(11):52.45、(15c):19.35、P2L:9.30、P2B:6.35、P3L:10.90、P3B:7.35、P4L:11.85、P4B:8.95	
23	15	ANo.14-3	SX4009	3	I-4	第4遺構面	不明	哺乳綱	ニホンジカ	尺骨	R	骨幹部＋関節部	f	cm(D1a 骨幹部内則、Y 内側)	暗褐色	viv	BPC:19.95、DPA:35.75、SDO:33.10	14-1、15-1と同一個体
85	16	ANo.49-3	SX3093	3	M-4	第3遺構面	17c 初頭-18c 前半	哺乳綱	ニホンジカ	上腕骨	L	遠位端＋遠位部	d:f	cm(D1a 骨幹位遠位端内側より D3a 遠位端)	茶褐色	viv	Bd:37.55	
3	3	ANo.3	SD3005	1	E,F-5	第3遺構面	17c 初頭-18c 末	哺乳綱	ニホンジカ	上腕骨	L	骨幹部＋遠位端	d:f	cm(D1a 骨幹部後位外側、前位)	茶褐色	viv	SD:19.10、BT34.25	
93	4	ANo.56	SD3003	3	D-4	第3遺構面	18c 後半-末	哺乳綱	ニホンジカ	上腕骨	L	遠位端＋骨幹部	d:f	cm(D1a遠位端幅6.35mm)	茶褐色	なし	Bd:35.90	
52	5	ANo.31-4	SD3003	3	E-4	第3遺構面	16c-17c 初頭	哺乳綱	ニホンジカ	上腕骨	L	遠位端＋骨幹部	d:f	sp?cm(D1a遠位部前位、遠位端、D3a 遠位部)	茶褐色	viv	Bd:34.90、BT:31.00、SD:16.20	
30	6	ANo.18-3	SD3003	3	K-4	第3遺構面	不明	哺乳綱	ニホンジカ	上腕骨	L	骨幹部＋遠位部	?	Y(遠位部)	茶褐色	viv	SD:16.80	
29	7	ANo.18-2	SD3003	3	K-4	第3遺構面	不明	哺乳綱	ニホンジカ	上腕骨	R	遠位端＋骨幹部	d:f	cm(B1a 遠位端)	茶褐色	viv	SD:18.65	
21	8	ANo.14-1	SX4009	3	I-4	第4遺構面	不明	哺乳綱	ニホンジカ	上腕骨	R	骨幹部＋遠位端	d:f	cm(D1a 遠位部前位、Y 近位部)	暗褐色	なし	Bd:36.90、SD:21.90、BT:32.40	14-3、15-1と同一個体
11	12	ANo.9-2	SK4055	3	J-5	第4遺構面	～17c 前葉	哺乳綱	ニホンジカ	上腕骨	R	骨幹部＋遠位端	d:f	cm(D1a 骨幹部後位)	茶褐色	viv	SD:18.10、BT:(31.55)	
36	13	ANo.22	SX4015	3	M-7	第4遺構面	16c-17c 初頭	哺乳類	ニホンジカ	上腕骨	R	骨幹部＋遠位端	d:f	cm(D1a 骨幹部前位外側)	茶褐色	viv	SD:17.00、Bd:34.85、BT:30.00	

番号	No.	遺物 No.	遺構名	区	地区	層位	時代	大分類	小分類	部位	LR	部分	成長度	破損	色調	風化	測定値	備考
88	14	ANo.52-1	SK3070	3	L-3	第3遺構面	17c 初頭-18c 前半	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	L	近位端＋骨幹部	p:f	cm(D1a 近位端回転子)	茶褐色	なし	DC:22.45, BP:(55.00)	34-2,52-2と同一個体の可能性あり
37	15	ANo.23	SX4015	3	M-7	第4遺構面	16c-17c 初頭	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	L	骨幹部	d,p:uf	cm(D1a 骨幹部後位)	茶褐色	viv	残存全長:179.25、SD:17.00	
61	16	ANo.37	第3包層	1	J,K-8			哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	L	骨幹部	d,p:uf	cm(D1a 骨幹部後位、遠位部筋肉粗面、D3a 骨幹部前位)	ノーマル	viv	SD:17.05	機械堀削
38	17	ANo.24-1	SD3003	3	F-4	第3遺構面	16c-17c 初頭	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	L	骨幹部	p:uf	cm(D1a 骨幹部外側、Y 骨幹部近位部)	茶褐色	viv	SD:18.80	
89	18	ANo.52-2	SK3070	3	L-3	第3遺構面	17c 初頭-18c 前半	哺乳綱	ニホンジカ（キュウシュウジカクラス）	大腿骨	L	遠位端＋骨幹部	d:f	sp(前位・骨幹部)、偽切創？	茶褐色	なし	Bd:47.00	34-2,52-1と同一個体の可能性あり
26	19	ANo.16	SX4009	3	I-4	第4遺構面	不明	哺乳綱	ニホンジカ（キュウシュウジカクラス）	大腿骨	L	完形（大転子一部欠損）	d,p:uf	cm(D1a 骨幹部前位)	暗褐色	viv	SD14.85、Bd:43.35、DC:194.15, GLC:19.60	
58	20	ANo.34-2	第4包層	3	H,I-4,5			哺乳綱	ニホンジカ（キュウシュウジカクラス）	大腿骨	L	骨幹部	不明	cm(D3a 骨幹部後位、右内側、D1a 骨幹部後位、Z 骨幹部後位右内側寄り)	茶褐色	viv	SD:17.60	52-1、52-2と同一個体の可能性あり
50	21	ANo.31-2	SD3003	3	E-4	第3遺構面	16c-17c 初頭	哺乳綱	ニホンジカ（キュウシュウジカクラス）	大腿骨	L	遠位端＋骨幹部	d:f	cm(Y,近位端、D1a 遠位部後位、遠位端後位)、偽切創(骨幹部左内側))	茶褐色	viv	SD:17.30、Bd:41.95	
55	22	ANo.32-2	SP4092	3	G-4	第4遺構面	16c-17c 初頭	哺乳綱	ニホンジカ（ホンシュウジカクラス）	大腿骨	R	近位部＋骨幹部＋遠位部	?	cm(Y 近位端，遠位端)	茶褐色	なし		
33	23	ANo.21-1	SX4015	3	M-7	第4遺構面	16c-17c 初頭	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	R	骨幹部	d,p:uf	cm(D1a 骨幹部後位筋肉粗面部)	茶褐色	viv	SD:18.55	
51	24	ANo.31-3	SD3003	3	E-4	第3遺構面	16c-17c 初頭	哺乳綱	ニホンジカ	中足骨	R	完形	p,d:f	cm(D1a 右外側骨幹部)	茶褐色	viv	Bd:24.15、SD:14.85、Bd:27.85、GL:225.30	
78	25	ANo.45-1	SK3066	3	K-5	第3遺構面	16c-17c 初頭	哺乳綱	ニホンジカ	橈骨	L	完形	p,d:f	cm(D1a 側面2, 3, 4条以上 D1a 側面に少なくとも20条以上連続的にある)	茶褐色	viv	GL:191.90、Bp:34.55、Bd:31.30、SD：19.45、BFp：33.05、BFd：26.95	
44	26	ANo.27	SD3003	3	H-3	第3遺構面	16c-17c 初頭	哺乳綱	ニホンジカ	橈骨	L	完形	d,p:f	cm(D3a骨幹部前位後位、Y 遠位端遠位部)	茶褐色	viv	SD:18.35、Bd:28.40、Bp:32.45、GL:170.15	
34	27	ANo.21-2	SX4015	3	M-7	第4遺構面	16c-17c 初頭	哺乳綱	ニホンジカ	橈骨	R	近位端＋骨幹部	p:f d:uf	cm(D1a骨幹部前位遠位部)	茶褐色	viv	SD:18.80、Bp:32.35	
22	28	ANo.14-2	SX4009	3	I-4	第4遺構面	不明	哺乳綱	ニホンジカ	橈骨	R	完形	d,p:f	cm(D3a骨幹部前位、Y 近位部)	暗褐色	viv	BP:35.65、BD:32.00、GL:194.60	
28	29	ANo.18-1	SD3003	3	K-4	第3遺構面	不明	哺乳綱	ニホンジカ	橈骨	R	完形(骨幹部一部欠損)	p:f,d:uf	y(近位部)	茶褐色	なし	Bp:33.65、SD:19.00	
100	30	ANo.63	第2遺構面	4	K-15	第2遺構面	18c 後半-18c 末	哺乳綱	ニホンジカ(キュウシュウジカクラス)	橈骨	R	完形	p,d:f	偽切創(前位骨幹部)、cm なし？	茶褐色	なし	GL:191.80, PL:182.25, Bp:35.40, SD:20.50, Bd:30.95	
54	31	ANo.32-1	SP4092	3	G-4	第4遺構面	16c-17c 初頭	哺乳綱	ニホンジカ（ホンシュウジカクラス）	橈骨＋尺骨	L	遠位端＋骨幹部	d:f	sp(骨幹部), cm(D3c 骨幹部全面)	茶褐色	なし	BFd:32.40、Bd:33.00	L 尺骨遠位部・遠位端を癒合し伴う
62	32	ANo.38	SX3013	3	K-5	第3遺構面	17c-18c	哺乳綱	ニホンジカ	中足骨	R	完形	d,p:f	cm(D1aD1c？骨幹部後位左内側、D3a 骨幹部後位、Y 遠位端)	暗褐色	viv	GL:206.85、Bp:25.35、Bd:27.10、SD:15.85、BB:7.95	断ち割り
25	33	ANo.15-2	SX4009	3	I-4	第4遺構面	不明	哺乳綱	ニホンジカ	中足骨	L	近位端＋骨幹部	d:f,p:f	なし	暗褐色	viv	Bp:23.20、SD13.00、Dd:12.20	

番号	No.	遺物 No.	遺構名	区	地区	層位	時代	大分類	小分類	部位	LR	部分	成長度	破損	色調	風化	測定値	備考
84	34	ANo.49-2	SK3093	3	M-4	第３遺構面	17c 初頭-18c 前半	哺乳綱	ニホンジカ	中手骨	L	骨幹部＋遠位部	uf	なし？sp?	茶褐色	viv		
43	35	ANo.26	SD3003	3	E-4	第３遺構面	16c-17c 初頭	哺乳綱	ニホンジカ	中手骨	R	完形	p, d : f	cm(D1a 骨幹部前位内側)	茶褐色	viv	GL:159.20、Bp:22.50、SD:13.55、Bd:22.55	
35	36	ANo.21-3	SX4015	3	M-7	第４遺構面	16c-17c 初頭	哺乳綱	ニホンジカ	中手骨	R	近位端＋骨幹部	d : uf, p : f	なし？	茶褐色	viv	SD:15.50、Bp:24.65	明確な剥離痕跡あり
81	37	ANo.47	SK3066	3	K, L-5	第３遺構面	16c-17c 初頭	哺乳綱	ニホンジカ	肋骨	R	完形（一部欠損）	f	cm(D1a 遠位部外面５条程度極めて鋭利な刃器で斜め下より挿入)	茶褐色	viv		
31	38	ANo.19	SK4079	3	M, N-34	第４遺構面	16c-17c 初頭	哺乳類	ニホンジカ	角	L	角冠＋主幹(一部欠)＋第１枝(一部欠)	２才以上	cm(Aa 第１枝)	茶褐色	viv, 著しく表面剥落		落角
	39	Ano.58	第３遺構面	3	H-4	第３遺構面	18c 後半-末	哺乳綱	ニホンジカ（キュウシュウジカクラス）	角	L	主幹・第２・３枝基部	第３枝を持つ枯角	cm(B3c 角幹部、横方向２条以上、Ac角幹部上下端部)	茶褐色	viv	残存長136.00mm	♂、角幹部に厚さ約1.2mm の鋸による切断が最低５回行われている。
45	40	ANo.28-1	SD3003	3	E-4	第３遺構面	16c-17c 初頭	哺乳類	ニホンジカ	腰椎	M	完形（後位椎顆一部欠損）	ant : f, post : uf	cm(D1a 横突起)	茶褐色	viv	BFcr:23.15、HFcr:19.50	28-2と同一個体
46	41	ANo.28-2	SD3003	3	E-4	第３遺構面	16c-17c 初頭	哺乳類	ニホンジカ	腰椎	M	完形（後位椎顆，一部欠損）	ant : f, post : uf	cm(D3a 側棘突起)	茶褐色	viv	BFcr:23.60、HFcr:18.85	28-1と同一個体
74	42	ANo.42-3	SK3015	3	E, F-3, 4	第３遺構面	17c 後半-18c 前半	哺乳綱	ウマ	上顎 I 2	R	完形	小窩連結	なし？	茶褐色	viv	残存全長62.10、咬合面 L:17.45、B:9.20	42-4と同一個体
75	43	ANo.42-4	SK3015	3	E, F-3, 4	第３遺構面	17c 後半-18c 前半	哺乳綱	ウマ	上顎 I 3	R	完形	小窩連結	なし？	茶褐色	なし	GL:62.40、咬合面 L:16.35、B:8.10	42-3と同一個体
5	5	ANo.5	SX3015	4	I, J-11, 12	第３遺構面	16c-17c 後半	哺乳綱	イエネコ	上腕骨	L	骨幹部＋遠位端(一部欠損)	d : f	なし？	茶褐色	viv	SD:7.75	肩甲骨高20～25cm 程度
60	6	ANo.36	SX3002	1	C-8	第３遺構面	18c 後半-末	哺乳綱	イエネコ	上腕骨	L	完形	d, p : f	なし？	茶褐色	viv	GL:84.25、Bp:14.60、Bd:17.90、SD:6.35、BT:11.85	肩甲骨高20～25cm 程度
40	7	ANo.24-3	SD3003	3	F-4	第３遺構面	16c-17c 初頭	哺乳綱	イヌ	寛骨	L	坐骨＋寛骨臼一部欠損	f	不明	茶褐色	viv		24-2と同一個体
39	8	ANo.24-2	SD3003	3	F-4	第３遺構面	16c-17c 初頭	哺乳綱	イヌ	寛骨	R	腸骨＋貴骨臼＋恥骨一部欠損＋坐骨一部欠損	f	cm(D1a 腸骨骨幹部後位)	茶褐色	viv	SL:14.75、SB:7.20、LA:18.55	24-3と同一個体
86	9	ANo.50	SK3101	3	N-6	第３遺構面	17c 初頭-18c 前半	哺乳綱	イヌ	下顎骨	L	完形(下顎骨.角一部欠損) I1×, 2×, 3×, C×, P2○, 3○, 4○, M1○, 2○, 3○	M1小窩独立、M3萌出終了	cm(D3a 下顎体下位)	茶褐色	なし	(1):11.05、(3):107.70、(4):97.30、(5):92.55、(7):62.05、(9):52.50、(10):28.55、(12):25.60、(13):17.80、(14):15.55、(15)L:7.40、B:5.90、(16)L:4.30、B:3.50、(19):21.20、(20):16.30	
87	10	ANo.51	SK3079	3	L-7	第３遺構面	～17c 後半	哺乳綱	イヌ	上腕骨	L	完形(近位端内側一部欠損) I1×2×3×C×P1歯槽2○3○4○M1○2○3○	d, p : f M1一部小窩独立	動物噛痕？(イヌ、ネズミ以外、遠位端)、cm(D1a 近位端)	茶褐色	viv	GLC:135.75、GLl:(136.70)、Bp:17.15、Bd:25.70、Dp:32.85	
101	11	ANo.66	第１遺構面	2	B-12	第１遺構面	18c 末-19c	哺乳綱	イヌ	上腕骨	R	遠位端＋骨幹部	d : f	なし？	茶褐色	viv	Bd:27.00、SD:10.85	
18	12	ANo.12-4	SK4043	3	H-3	第４遺構面	～17c 後半	哺乳綱	ネズミ科	寛骨	L	完形	f	なし	茶褐色	viv		

計測値(1)～n は、Driesch 1976に依拠

報告書抄録

ふりがな	とくしまじょうかまちいせき　なかとくしまちょういっちょうめちてん
書名	徳島城下町遺跡　中徳島町１丁目地点
副書名	徳島県立城東高等学校校舎改築工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	徳島県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第57集
編著者名	富岡　直人　　久保脇美朗　　高橋　栄子　田所　賢治
編集機関	財団法人　徳島県埋蔵文化財センター
所在地	〒779－0108　徳島県板野郡板野町犬伏字平山86番２　TEL 088－672－4545
発行年月日	西暦　2005年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とくしまじょうかまち 徳島城下町 いせき　なかとく 遺跡　中徳 しまちょういっちょうめ 島町１丁目 ちてん 地点	とくしまけんとくしまし 徳島県徳島市 なかとくしまちょういっちょう 中徳島町１丁 めごばんち　ほか 目５番地　他	36201	―――	34度 04分 10秒	134度 33分 40秒	20010401～ 20020331 20020401～ 20020831	4,334m²	徳島県立城東高等学校校舎改築工事に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
徳島城下町遺跡 中徳島町１丁目 地点	武家屋敷等	中世 ◎近世	柱穴 土壙 土抗 溝 集石遺構	陶磁器（肥前・備前・京焼・瀬戸美濃・唐津・関西系・珉平・大谷焼・中国）、瓦 土師質土器、瓦質土器 金属・銭貨、木製品、骨角製品、貝類など	屋敷地区画溝 集石遺構 宗教関連遺物

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第57集

徳島城下町遺跡中徳島町１丁目地点
－徳島県立城東高等学校校舎改築事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書－
（第１分冊　本文編）

発行日　平成17年３月31日

編　集　財団法人　徳島県埋蔵文化財センター
〒779-0180　徳島県板野郡板野町犬伏字平山86番２
ＴＥＬ（088）672-4545

発　行　徳島県教育委員会
財団法人　徳島県埋蔵文化財センター

印　刷　株式会社教育出版センター